
Accesses アクセス

KuRo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A c c e s s e s ア ク セ ス

【Nコード】

N 3 2 3 7 X

【作者名】

K U R O

【あらすじ】

なんだかよくわからないうちにどこかのゲーム世界に放り込まれた俺こと青柳^{やなぎりょうすけ}霊介、ついでに親友の香川^{かがわこうた}光蛇。

ゲームクリアすれば元の世界に還れるっばいけど、クリア方法がわからない。

なにこのクソゲー？

……まあ、とりあえずそんなこんなで困難を乗り越えてく話、かなあ。

この小説は作者が他サイトで書いている小説の改訂 修正版です。
内容はほとんど変わりませんが……

あと、一応警告タグ付けてますが、ただの保険です。あるかもしれません
ませんが、基本この小説にあまりグロ描写はないです

夢の中での出来事（前書き）

えー、この小説は作者が結構前に作り始めていたものなので（続行中）同時進行をして掲載されている『知らない天井だ……。』という作品より文章力がおそらく結構下がっています。申し訳ありませんが、どうかよろしくお願いします

P・S・ 序章なので短いです

夢の中での出来事

「……どこだ、ここ」

俺はただ、真っ黒いだけの殺風景な場所に立っていた
頬をつねってみる

「あ、痛くないわ。夢か。寝よ」

そう言って寝ようとする

『待て』

なんか空から声が降ってきた
まあ夢だからどうでもいいか

「イヤだ。昨日あんま寝てないんだよ、寝させる」

『いまは夢の中だから寝ているだろう』

「夢の中でも眠いもんは眠いの」

『いいから、聞け』

うるさいな、こいつ

「じゃあ用件だけ言ってろ」

そう言っただけになる

『……まあいい。お前、ゲームの世界に行きたいと思わないか？』
「そっすね」

「……もし入れるとしたら、どうする」

「そっすね」

「……お前をゲームの世界に連れて行ってやるっ」

「そっすね」

「……豚が空を飛んでるぞ」

「え、マジ？」

「なぜそれだけ反応する……」

「あー、ごめん。なんも聞いてなかったわ。もっかい言うてくれ」

「……ゲームの世界に行きたくはないか？」

「おい、空に飛んでないぞ」

「……お前をゲームの世界に放り込んでやるっ」

「おい、クソ。どこに飛んでるんだよ」

「……もういいや。勝手にしてくれ」

「おい、どこに豚がいるんだよ！」

そうして俺は、豚を見つげるために目を凝らした

じゃなかった。

そうして俺は、ゲームの世界にダイブした

夢の中での出来事（後書き）

……結構ストック余ってるんだよね

ゲーム世界での始まり

「…………んあ？」

目が覚めると、俺は見知らぬ天井を見上げていたでも、まあそんなこと後で考えればいいか

「なんだっ たんだ、あの夢」

とりあえずベットから起きあがる

「結局、豚が飛んでなかったし」

さて、ここはどこだ

階段が部屋の角にあり、下へ続いているから二階なんだろう、と思
いながら地に足を着いて、下に降りてみる

「おお、目が覚めましたか」

一階には、なんか変なじいさんがいた

頭上には、なんか『村長』って名前が表示されている
「なにそれ」

とりあえずそれを指さして聞く

「ああこれですか。名前ですよ」

「ソンチヨウって名前なのか？　ずいぶん変わった名前だな。ソ
ンが名字でチヨウが名前か？」

「…………はい？」

「あー、まあ、ここどこ？」

一番気になっていることを聞く

「私の家ですが」

「見ればわかる。なんで俺はここに？」

「山で倒れてました」

「ありえねえよバカ。それで、ここは日本か？」

「ニホン？」

どうやら違つようだ

「まあどうでもいいや。自分で調べますわ。んじゃ、とりあえず親切にどーも」

そう言つて俺は立ち去ろうとするが呼び止められた

「待ってください」

「なんすか、チヨウ」

「村長です」

「ソン・チヨウか。外国人みたいな奴だな」

「これをお受けとりください」

そう言つてじいさんは変な草を差し出してきた
なんか上に『薬草』って表示してある
ゲームみたいな仕様だな

つか、ほんとにここはどこだ

「どうも」

そう言って口に入れた

「まずっ」

しかしすぐに吐き出す

「それは傷口に塗るものなんですが……」

ゲームみたいな仕様だ

「こんな不味い物はいらない。それじゃあさようなら」

今度こそ俺は立ち去ろうとする

いつまでもジジイといっしょにいたら気持ち悪いからな
美人ならともかく

ここはどこだとか、なにがどうなってるとか、後で考えよう。ど
うせわかんないし

「シーユー、薬草ジイさん」

そう言って俺は外に立ち去った

……村だ

マジでどこだよ……

「ゲームの世界だったりして」

まあ、そんなわけないか

適当にそこらへんをぶらぶら歩いていたら、知り合いとすれ違った

「お、やあ霊介」

そいつが声をかけてきた

言い忘れてたが、俺の名前は青柳霊介だ

「なんだ光蛇か。いま忙しいからまたいつか」

「いやいやいや……」

「うるさい奴だな」

「お前のことだからもしかしたらってこともある。ひとつ聞きたい」

めんどくさい奴だな……

「なんだ？」

「ここが、この世界がどこかわかるか？」

「知るか。じゃあな」

美人以外とあまりしゃべりたくないなあ……

「だから待てって」

「なんだよ……」

まったく気にしてなかったのだからなかったが、よく見るとこいつはRPGの戦士みたいな格好をしていた
ちなみにこいつの名は香川光蛇だ

「うわっ、コスプレとか（笑）」

ちなみに俺は学校の制服

「いやだから違……ってああああ！　これだから馬鹿は……」

なんか失礼な物言いだな

「で、なんだ？」

とりあえず聞く

「ああ。お前、この世界がどこかわからないって言ってたな」

「そっすね」

「ここはゲームの世界だ」

「へー、凄いつすねー」

「……ステータスウィンドウ開いてみる」

「んなこと……」

「できるよ。ウィンドウって言い放てば」

こいつの話は半分聞き流していたが、さすがにこれには興味を持った
つか、こいつの頭上には『コウタ』と名前が表示されていた。ま

あ仮にゲーム内だとすると、ド。クエみたいな王道だと名前を漢字にできないしな

「……ウィンドウ」

言つと同時に、本当にステータスウィンドウが表示された

「ウィンドウ」

こいつも言つてステータスとやらを開く。こいつのステータスが見えないことを考えると、他人にはウィンドウ内が見えないということだろう

「すげーなあ」

まあそんなこともどうでもよかった
ゲーム世界だろうが現実だろうが、美女がいればそこがパラダイスだっ！

「マイペースだな。少しは驚けよ」

「すまない興味が無いんでね」

「エ。シャダイネタ、パクるな」

まあそんなこんなで、俺はこのめんどくさい奴からいろんな説明を受けたとさ

話をまとめると、こうだ

ゲームの世界へおっさんが誘つてきて、この世界に来たらしいおっさんは嘘付きのクソ野郎だと思っていたが、そんな力があるならエロゲーの中に入れて欲しかった

んでRPG風のゲーム世界に来たものの、帰れないのだというまったくアホな話だ。ちなみにウィンドウ覧のヘルプに、ご丁寧

にいろんなことが書いてあった
この世界と、現実のつながりとか
この世界についてとか

「くっそ……」

隣の光蛇は悪態をついていた

「クソ……」

俺もだ

そりゃあもちろん

「どうしてエロゲー内に入れてくれなかったんだ……」

「え？ そこお……？」

「他にどこに怒れと……？」

「いや、だって……元の世界に帰れないんだぞ？」

「クリアすれば帰れるって書いてあったじゃん」

「いや、まあ……」

「それに現実とこのことじゃ、時間の進み方が違っつてヘルプに書いてあったじゃん」

ここでの1週間が、現実の一日らしい

「しかも夏休み中だし」

初めの方で、休みもかなりあまっている

「気楽にクリアしていこうか」

「親が心配するかも……」

「親？ ……まあ、そうだな」

……実は去年死んでたり

「……ごめん」

「なにを言ってるんだねワトソン君。見窄らしいではないか」

「誰がワトソンだ。しかも見窄らしいの意味をはき違えるな」

「黙れホームズ」

「ホームズでもないからな」

「ちなみにホームズは実在しているぞ」

「知ってるから」

そんなこんなで、光蛇が仲間に加わった

閑話休題

「で、お前はどんなんだ？」

空が夕暮れに染まった頃、すべてのヘルプを読み切った頃合を見計らって、俺は問いた

「どうって？」

「家族を現実に残して、ここにきちまって、ってこと」

正直、俺は心配していた

仮にも……いや、こいつは大事な友達だ。心配をせずにはいられなかった

「ああ……気にしてもしかたないし、時間はたくさんあるしね。お前といっしょなら、ゲームクリアなんて楽勝だ。俺はここで勇者になってやる」

「と思ってる奴ほど早く死ぬ」

「この世界での死は、現実の死を意味する……ってヘルプにあった

な」

「ま、いざつてときは逃げればいいさ。俺はド。クエ8で、ゲームクリア時は出会ったモンスターが50000なのに対して逃げた数が28000くらいだったし」

「凄い数だな……」

「ぶっちゃけ戦うのがめんどかつただけだけど、逃げるのは大切だろ」

「だな」

「そろそろ眠くなってきたなあ」

「マイペースな奴だ……」

「夏休みが7倍に増えるんだぞ？ 少しは喜べ」

「はいはい。んじゃあ宿でも探すか」

「ちょっと待て」

しばらく歩いた後、俺は言った

「これおかしいだろ。どのゲームか知らんけど、なんでRPGの中なのに地図がないんだよ」

「そういう仕様なんだろ」

「馬鹿言うな。ド。クエだろうがぜ。伝だろうがファイ。アンだろうが、街や村には100%地図があるもんなんだよ」

「まあそうだけど……」

「なのに、なにこれ。なんで探さなきゃいけないの？ こんなの王道RPGじゃねーよ。地図のないRPGなんて材料があるのに作り方がわからないケーキだよ」

「なんでケーキ限定なんだ」

「こりゃクソゲーだな」

「自分でマッピングしてろ」

「そういうのは違うゲームの仕事だ。RPGにはまったく必要ありません。つか制作者が地図作って配布しろや」

「このゲームの制作者って誰だよ……」

「あのおっさん？」

「かもな。お、宿あったぞ」

「おいクソジジイ！ MAPよこせ！ こんな王道RPGじゃねえ！」

「叫ぶな。周りに迷惑だ」

「ところで……」

俺たちはひとつの小部屋を借りて（金は光蛇払い）とりあえずひと休みしていた。そうしていたら、光蛇が口を開いて、言った

「霊介はどんな職業にしたんだ？」

「は？ なにが？」

「だから、職業だよ。あの男に聞かれただろ？」

「いや、まったく」

「こいつが話を聞かないからあいつも途中で話を投げ出したんじゃないだろうか」

「まあそんな感じだったな」

「馬鹿だ……」

そんな会話をして、ウィンドウと俺は呟いた

「そっぴゃ、お前の職業ってなんだ？」

「ん？ ウィンドウ」

光蛇はそう言うとなんか変な風に指を動かして（他人には相手の

ウィンドウ見えないので変に見える）なにかをする
すると、光蛇のウィンドウが俺にも見えるようになった

「これで他人にも見えるようになる」

そう言うと、光蛇はステータスを表示して、俺に見せた
俺は自分のウィンドウの操作を一時中断して、そちらを見てみた

「Lv38（なぜいきなりこんなに高い……）のフレイムバスター
か」

「ちなみにこれは二次転職後の職業らしい。一次はバスターで、二
次は他にもライジングバスターとかがあるらしい」

「らしいってなんだ」

「炎の扱う戦士って希望したんだけど、いきなりLv38だったか
ら驚いた。しかもいきなり二次転職後の職業だったしな」

「変な仕様だな。やっぱこりゃクソゲーか」

とりあえずSTRに次いでINTなどが高く、LUKが低い魔法
戦士系の職業だった

ちなみにこの世界ではそういう能力値をある程度は自分で振り分
けられることができるらしい

「で、俺は……っ」

……なんだこの職業、ふざけてんの？

とある少女との出会い

俺のステータスに表示されていた職業……
それは、

「職業、『バカ』。Lvは『気分』」

ってなんだそりゃああああああああ

「なにこれ！？ ふざけすぎだろ！？ なんだよ職業バカって！
それ性格だろうが！ しかもなにLv気分

って！ 適當すぎんだよあんのクソジジイが！」

あのクソ嘘付きのおっさんに俺は激怒していた
対して光蛇と言えば、大爆笑して床をころげ回っていた
それを蹴り転がしながら、俺はさらにウィンドウを見た

「HP『諦めるまで』。MP『疲労がMP』。STR等には『バカ
に数字はわからない』って書いてあるんだが……」
「すげえ、前代未聞な能力値だ！」

そう言いながら光蛇は笑う
そして俺はそれを蹴る

「技は？ どんなのがある？」

しばらくして立ち上がり、光蛇が落ち着きを取り戻して聞いた

「ん……スキルがふたつあるな」

「なんだ？」

「……『バカにしかできないこと』と『自分で考えてるバカ』」

「名前は適当だが、二つ目は貴重だぞ。自分でスキルを作れるみたいだからな」

「確かに、な」

職業バカも捨てたもんじゃない

「お、しかもこれプログラムから直接作成できるから、チートっぽいのも作れるぞ」

HPやMPを格段に消費するみたいだが……

「この際なんかひとつ作っとくか」

というわけで次の日。

俺はとりあえず表面上はシーフという面目として（聞かれたときにめんどくさいから）それっぽい防具を買いにかかった

バカという職業は、鎧全般が装備できないみたいだ

なので適当な黒い服を選び（理由は、夜に目立たなくてシーフを偽るときに都合がいいから）村の出口へ向かった

目的地は無いが、適当にぶらぶらしてればいいだろう

「これから人生初めての狩り旅だと言うのに、のんきだなあ」

ちなみに俺の武器は……秘密だ

ただ断言すると、ファンタジー系ゲームにはぜつつつつつたいに使ったら反則な武器だ。あとついでに短剣も装備してる

光蛇は王道なはがねの剣に、鉄の軽鎧という姿

「ま、そう言うなって。まだ戦ったことがないから俺たちは戦いの危険とかがよくわからないんだよ」

「へいへい、勇者様」

「勇者という職業は存在するらしいぞ」

「マジか」

「マジ」

「まあどうでもいいけど」

と雑談をしながら出口の目の前を通りかかると、モンスターに襲われている人間が遠くに見えてきた

「ん？ あれって？」

「敵、だな」

「ふーん」

「助けるぞ」

「へいへい」

そうして俺たちは走り出した

戦士系の職業というのは、足が遅いのが定番だ

それよりは少し速い魔法戦士と言えど、軽鎧を装備してればまあ遅い

と、いうわけで俺がさきにモンスターのそこへたどり着いてしまった

襲われていたのは、少女だった

まあ今はそっちより……

「こっちのモンスターが問題だな……」

実際、バカって職業はSTRなどのステータスがどのくらいあって、Lvがどのくらいなのか分からない
はつきり言って、不安だ
まあ弱いとしても序盤に出てくるようなモンスターにやられるとは思わないが

相手は、ゴブリン二体（頭の上に書いてあった）だった

「まあ、そういうの、よくでてくるよな」

言いながら俺は一体のゴブリンへ走り込んだ

短剣を抜き、構える

実戦は初めてだが、戦いは初めてじゃない

まあ時間がないし、またいつか話そうか

俺の接近に気づいたゴブリンが右手から火球を放ってきた

「おい！ 超序盤の敵は魔法を放たないってのが全ゲームのお約束のはずだろうが！」

そう言いながら、俺はかわす

避けながら試しに短剣で火球切ってみると、きちんとまっぴらになった

「よし」

そして残り2mといったところで、俺は高くジャンプした

現実と違いかなり高く跳べたのは、ステータスのおかげだろう

空中で簡単に身動きの取れなくなった俺を、ゴブリンの火球が襲う
俺はそれを軽く見切って、短剣で切断する

そして降下の勢いのまま、短剣をゴブリンの目に突き刺した

「……こつちも」

グサツ、グサツ

着地した俺は左目に刺した短剣を抜いて、右目にも刺してあげた

「よし！」

望み通り、ゴブリンは倒れた

やはりこういうところは弱いのか。ボスにも効くか今度試すか

一匹を倒すと、もう一匹のHPバーが見えるようになった

おそらくモンスターを一匹倒すと、その種類のモンスターのHPが見えるようになるのだろう

「さて」

俺は短剣でこいつの首を切って

「ほらよつと」

もう一匹に投げた

すると見事にキャッチした

「おお……」

素直に感心していると、光蛇が追いついてきて、もう一匹のゴブリンへ襲いかかった

あんなゴブリンじゃあLv38の前に瞬殺だなと読んだので、あつちの戦いは無視して俺は少女の方へ向かった

「だいじょうぶ？」

「え……あ、大丈夫です」

「ま、あいつ強いから。なんかゴブリン以外にも遠くからなんか来ようとしてるけど、あいつなら問題ないと思うよ」

「ありがとうございます」

「俺はもうほとんどなにもする気はないからあいつに礼は言つてよ」

一見、美少女だ。

長い茶髪に、輝く黄緑色の瞳。あと……なにこれ？ キツネ耳？ 猫耳？ ウサ耳？ ウサギはありえないか。まあそんな感じのと茶色い尻尾が生えてる

服はボロボロの茶色いマントに身を包んでいた。小柄な身長で、ラノベのヒロインにいてもおかしくないようなやつだ

まあ、俺の中での興味ランキングは1、美女 2、エロゲ 3、美少女 と言った感じだから、この少女には多少興味がいったが、さすがにラノベみたいなロリコン主人公みたいな奴とは違う意味で興味だ

異性としてとかではなく、ただの興味本意だ。たぶん。だって俺、ロリコンじゃないし

そしてこいつの頭上に表示されている名前は、「クウ」

まったく、めずらしい名前だ

いや、この世界ではそれが普通なのかね

「おー、がんばー」

そうして俺と少女は光蛇が遠くの方のモンスターへと向かって走っていくのを傍観者として見送った

そうして初めてのバトルが終わりを告げ（光蛇の攻撃であのモン

スター達一発でやられてた）、俺と光蛇は少女を連れて村に戻った
とりあえず、これまで休んでいた宿へ

「しかし、なあ……」

俺は帰ってくるなり文句を言う

「なんでアイテムとかGゴールドって自動で入らずに拾わないといけねーの？
経験値は自動ではいるのにさ……ド。クエみたいな王道じゃなくとも、ドロップをいちいち拾うなんて全然ないぞ？ やっぱこれクソゲーだろ」

「まあ、いいだろ？ 拾えばしまわなくても勝手にウィンドウの持ち物覧に移動して、いちいち持たなくてもいいんだから」

「そりゃ当たり前前の仕様だ」

「第一、お前は経験値は勝手に入るとか言ってたけど……お前のLVは気分だろ？ 経験値とか関係ないんじゃないのか？」

「それこそ『気分』だよ。経験値たくさん入れば、よしやるぞって気になるじゃん」

「まあそうだけど……」

「そつ、その……」

あ、そついやこの女の子の存在を忘れてたな

「ん？」

「改めて、ありがとうございます」

俺は返事をしない
代わりに光蛇が言った

「どういたしまして」

ま、俺はほとんどなにもしてないしな

「それじゃ俺はそこらで買物でもしてくるよ。事情を聞く前に、腹後しらえをしておかないとな」

「まあ、そーだな。初めての『実戦』だったし、休みは必要だな」
「そういうことだ」

そう言つて光蛇は立ち上がる

「君も、ここでゆっくりしていてくれ」

光蛇は去り際に少女に言った

「……」

しかし返事はない

「護衛頼んだぞ、霊介」

「わかつてるよ」

俺がそう言つたのを確認すると、あいつは部屋から出ていったと、同時に俺はベットに身を投げ出した
そうして数秒が経った頃、少女が口を開いた

「あなたたちは、私を『助けて』くれたのですか？」
「んー……」

俺は話を半分聞いてなかったもので、いま少女が言ったことを思い出してから、言う

「違うね。俺は助けてない。助けたのはあいつだ」

「ならあなたは、あの人がいないときに私が襲われていたら、どうしていましたか？」

「……」

どうして、いたんだろうか。

考えるまでもない。きっと助けていた

「ほら、あなただって、私を助けたかったんですよ。ありがとございます」

「まあ……そうだな。そうかも、な」

曖昧な返事しかできないのは、半分話を聞いていないのと、そんな空想に礼を言われてもしっくりこないからだ

「ところでさ。職業はなに？」

まったく関連性のない質問を、俺はした

理由はふたつだ

ひとつは、好奇心

ひとつは、俺の職業だけ『バカ』なのを気にしているから
と言ったところだ

「わ……私は……」

少女は少し迷ってから、やがて言った

「モンスターウィザードです」

「へー」

なんだ、ふつーの職業っぽいな。俺みたいな職業の奴はいないのか

「お……驚かないんですか？」

「ん？ だってどんな職業が知らんし」

「え……珍しいですね」

「そっすね」

だってこの世界来たばっただし

「……私は、モンスターと人間のハーフなんです」

「……へー」

「驚かないんですか……？」

「いや、ケットシーだと思ってたらハズレだったから落胆しちゃって」

ケットシーというのは、動物か人間かわかんない中途半端な種族のことを言う

「まあそんなことどうでもいいじゃん。モンスターだろうが人間だろうが。危害が無ければ敵じゃない」

とまあそう言った瞬間に、宿の入り口から変な怒声が聞こえてきた

襲撃と新たな仲間（前書き）

一応戦いますが、適当です

本格的な戦いは二章から書きます

襲撃と新たな仲間

はい、無視。無視しますよ。

めんどろ事はごめんだ。適当に話でもしよう

「じゃあ」

君は何歳？ と聞こうとしたが、なにやらそんなこと聞ける空気じゃなかった

このクウという少女は「ひっ……怖いよう……またあいつらが来たよう……」と泣きながら丸まっていた

なんだ、こいつのご用人か

そうして少し気になって、ベットから降りて入り口の出来事に壁越しで耳を澄ませていると、その問題を起こしているらしい奴らがこちらに向かってくる足跡が聞こえた

俺は軽い調子で

「ベットで布団にくるまってる」

と言う

俺はそのまま近くの椅子に腰を下ろした

そして数秒後、そいつらがやってきた

ガチャという音を立てて、扉が開く

「ここに動物耳と尻尾を持つ少女がいるというのは、本当か？」

はじめに入ってきた戦士らしき男がそう聞いてきた

「おいおい、ノックはしてくれよ。もし着替え中だったらどうすん

だよ。もしエロゲやってたらどうすんだよ。なんか気まずくなるじやん」

「知るか。なんだエロゲとは？ わからない単語だ」

はあ？ …… ああ、こいつ、この世界の人間か。ならわからないか

「第一、見ればわかるだろ？ そんな不思議少女、いるわけないだろ」

「そうとは限らないよ」

次に入ってきたのは魔法使いみたいな男だ
ちなみに、俺は興味ない奴の名前表示を見る気はない

「ここは小部屋だぞ。何人も入ってくんな」

「もしかしたらどこかに隠れているかもしれないじゃないですか」
「そうそう、いるんじゃないの？ あの半モンスターの化け物」

最後に入ってきたのは、シーフみたいな少女だ
名前は、「メイ」と書いてある

普通以上美少女未満と言った、赤髪の女の子だ

「もう少し胸が大きければもっと会話しようって気になれたのに…」

…」

「ほっとけ！」

そして始めに入ってきた戦士が言う

「さて、どこに隠れているのか、教えてくれないか」

「人生は、攻略本のないゲームなんだぞ？ 人に答えを教えてもらうというのは反則だぞ」

ちなみにこのセリフ、あるラノベからある程度パクったものだ

「それもそうですな」

……攻略本って単語は伝わるのかよ。意味わからん

まあ、とりあえず魔法使いっぽい男がそう言っと、歩きだした

「おじゃましますは？」

「おじゃまします」

おお、この魔法使い礼儀作法が良いな
名前は……「セイス」か。良い名だ

「そうだなあ……ベットの下のとか？」

メイという女の子がセイスへアドバイスした

「胸無しよ。そういうアドバイスは探す楽しみを削るのだぞ？」

「胸無し言っな！」

と言った後、メイちゃんは小声で「なんか調子狂っうなー」と言っていた

「あ、居ました」

あ、見つかった

というわけで俺はあいつらに盗られる前に速攻でクウをお姫様だっこして、窓から外へ飛び出した

「なぜバレたんだ……」

そう呟きながら走っていると、クウはおびえながらも

「あんなところでは見つかるのはあたりまえです……」

と言った

「マジすか」

「はい」

まあ、隠れるとこ無かったしな

「待ちなさい！」

ん、あいつらちゃんと入り口から出て来やがった。行儀が良い奴らだ。ちよっと気に入った

「さて、入り組んだ道でも入っていきますか」

そう言つと、俺は家と家の間という狭い空間を選んで進んでいった（村だからそんなに多くない）

そして3つ目のところを抜けようとしたら

「行き止まりか……」

振り返って戻ろうとしたが、もう目の前にはシーフのメイちゃん

が居た

さすが本場シーフ。足速いな

後ろの方からもセイス、戦士みたいな男という順で追ってくる

「観念しなさい」

「嫌だね」

俺にしては真面目な返答だ、と自分で思ってしまった

まあつまり、俺が考えているほど余裕がないってのを、体がわかっていいるのかもな

俺は行き止まりの方の壁へ背中を付けて、メイちゃんの方を見る自分からは動かずに道を塞いでいるだけで、どうやら後ろの二人を待っているようだった

そして二人が来た後、その三人はゆっくりとこちらへ詰め寄ってきた

（どうする？ あの昨日作った最強スキルを使って切り抜けるか？

……いや、あれは奥の手だ。そう簡単には使えない。と、すれば頼りなのは……短剣とは違う、俺の反則武器だ）

そう思い、俺はそれを使い安くするためにクウを地面に下ろした

「その化け物をこちらに渡してくれれば、危害は加えない。大人しく渡してくれないか？」

「人間つてのは欲望にまみれた世界で一番汚い生物なんでね。そんな奴にこいつは渡せない」

かつこよさげに言ってみる。もちろん適当に言っただけ

「お前も、人間だろう」

「残念ながら俺の欲望はこいつには向いていない。だからお前に渡すよりはよっぽどマシってわけだ」

「屁理屈を」

そんな会話をしながらも奴らはこちらに迫ってくる
そんな空気に耐えかねたのか、クウが突然叫びだした

「もういいですから……私に関わらなければ、私を手放せばあなたもあの人たちも助かります！ 一石二鳥じゃないですか！ だから……もう、私のことなんてほっといてくれていいんです、リヨウスケさん……」

ああ……俺の頭上には、そう表示されてるのか
場違いに、俺はそんなことを考えていた
だけど、体はいたって真面目な言葉を吐いた

「ふざけんなっ！ 一石二鳥？ お前が不幸になったら一鳥減るし、俺の気が晴れない。つまり一石零鳥だ。不幸しか訪れないんだよ、そんな選択！」

そう叫び返し、俺は懐へ手を入れた
それを不審に思ったのか、あいつら三人の内、戦士の奴が走り込んでくる

「俺はお前を守る！ そう決めた！ 理由も言って欲しいか？ それは……」

叫びながら、俺はその武器を取り出した
手に持つのは、不思議な形をした、鉄の塊

「お前が、苦しんでいるからだ！」
「……っ!!」

俺はその塊の、穴が開いた部分を戦士の奴に向ける
残り、3 m 弱
これだけ近いのなら、初めてでも当たるだろう

「くらえ!!」

セーフティを外し、俺はその引き金と呼ばれる部分を引いた

ガウンツツツツ!!

重く、強く、圧倒的に速い鉄の塊が穴から飛び出した
その塊は余裕で鎧を貫通し、相手の腹を撃ち抜いた
そう、これは銃だ。しかも世界最大の拳銃、DE
デザートイーグル

「なん……だ……これ……は……」

あまりの世界観の違う圧倒的な攻撃に、戦士の男が剣を取りこぼし、地面に膝をついた

「大丈夫か、靈介！」

そして同時に、光蛇が助けに来てくれていた

閑話休題

結局あの後、光蛇のおかげで簡単に決着がついた

HPを1/10くらいまで簡単に減らして、降参させてた

……俺の活躍って、なんだったんだ？

クウを狙ってきたロリコン達を宿へと縄を縛って運び、光蛇は奴らへ事情聴取へ入った

俺はそんなめんどくさいこと興味ないし、走って疲れたので速攻でベットへ横になった

そして寝ることに勤めようとしていると、クウが声をかけてきた

「リヨウスケさん」

「ん？」

「そのう……」

なんか、顔を赤くしてもじもじしている
なにこれ？ なんかのイベント？

「ありがとっ、ございました」

期待した俺がバカだった。ただのお礼の言葉だ

「俺はほとんど役立ってないよ。あいつらをとつちめたのは光蛇の……」

しかしそんな俺の言葉を遮って、クウは言う

「いえ。私は、あなたにお礼が言いたいんです」

「どーして？」

「どうしてもです」

「そーっすか」

「そうです」

そんなやり取りの後、クウが今度は重い口調で話し始めた

「私は、半人間で半モンスターです」

「知ってるよ」

「父親は誰かわかりませんが、母親は可愛いキツネさんなんです」
「それは知らない」

キツネの耳とキツネの尻尾だったのか、それって

「半人間なので……私はモンスターには人間と判断され、よく襲われてしまいます」

「ふーん」

「半モンスターなので……人間達からは、モンスターと判断されて襲われます」

「へー」

「それに人間を殺すと、その人は多大な経験値が得られるみたいなんです。その場合、罪を犯すことになりますが……私は人間でありモンスターなので、罪なんてなく多大な経験値を得られます。だから、みんながみんな、私を仕切りに狙ってくるんです……その三人

の方々も、私を狙ってきた人たちなんだよ思います」

「そっすか」

「そうです」

「そうなんすか」

「そうなんです」

……まったく、通じないなあ

俺の話を聞かない態度も、こいつは全然平気……ってか

「……大丈夫だ」

しかたなく起きあがって、俺はクウの頭を撫でる

「俺はお前を見捨てない。俺はお前を誰からも助けてみせる。そう、俺は決めた。理由も必要か？ 理由は……」

と言おうとしたところで「いいです」とクウは遮った

「その言葉だけで、十分です」

「そーかい」

「はい」

「……まったく」

しかたがない。もうこんなこと約束しちゃったら、こっするしかないだろう

「光蛇」

俺は友人の名を呼ぶ

「なんだ」

「こいつ、仲間にするぞ」

クウを指さして、俺は言った

「……本気か？」

「もちろんだ。本気と書いてマジ。本気だよ」

「よ、よろしく願います」

クウ自身も頼んでいたが、こいつは頭が堅く、うーんと唸っていた
少し、フォローしてやるか

「クウは、モンスターウィザードだ。いいか？ ウィザードだぞ？
魔法使いだぞ？ パーティバランスが取れて良いじゃないか」

こんなフォローでいいかね

そう俺が言くと、さすがに光蛇も首を縦に振り許可を出した
そして再び、あの三人から事情聴取を開始した

「よかったな。これで、晴れて仲間だ」

「はい！ そうです、改めて自己紹介をしておきます！」

尻尾を振りながら、クウは言う

確かこれって、動物が楽しいと感じているときの反応だっけ

「クウ・バルハルト。Lv6のモンスターウィザードです」

「青柳霊介。各種ステータスは……まあいつか教える」

クウは初め、不思議そうに感じる顔をしていたが、すぐに元に戻
って、今度は光蛇に向く

そうくるとわかっていたようで、光蛇は簡単に答えた

「香川光蛇。Lv38のフレイムバスターだ」

こうして俺たちの新たな仲間が、加わったのであった

次回予告、第二章（前書き）

はい、ほぼ名ばかりの次回予告です

誰視点なのかは言いません。新キャラなので言ってもどうせわからないです

次回予告、第二章

「くそ……なんなんだよこいつはっ!!」

私たちの仲間の一人がそう声を上げて、茫然と佇む大きな人型のモンスターへと斬りかかっていく

……しかし、それはまったく言っていないほどに意味を成さない仲間の彼が斬りつける瞬間、そのモンスターは移動……否、『消えた』

あまりの速さに、認識が追いつかなかったのだ

「あ、うああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!???」

そしてその姿を認識した頃には、もうすでに彼は攻撃された後だった

……彼は痙攣を起こしながら倒れ、ほとんど動かなくなってしまう

たった、一発で

「く……だめですね。勝てるわけがありません……撤退しましょう」
「……了解しました、隊長」

その命令に逆らう理由もない。むしろ同意したいくらいだ

こんなやつ相手に、このままで勝てるわけがない

それに、もう残っているのは私と隊長だけ。状況もかなり厳しかった

「仲間を連れて……早くここから撤退しましょう。幸い、いま『あいつ』が攻撃をしてきそうな気配はありません」

指示通りに動きながら、私と隊長は考える
これから、先のことを

「……誰かに、手伝ってもらうしかありませんね」

隊長が苦虫を噛み潰したような表情で小さく言ったその声を、私は黙ったまま聞いていた

N
e
t

G
a
m
e
.
.
.

さあ、新たな街へ（前書き）

はい、第二章始まりです

第二章は第一章より二倍以上長いので、第一章が短いと感じた人は安心してください

P・S・実は第三章から本格的なストーリーに入ったりする。なので第二章もまだ短い方で終わる

さあ、新たな街へ

あの戦士の男（名前こいつだけ知らん）とセイスとメイちゃんは、俺が光蛇を説得して、逃がしてあげた

少し面白い奴らだったし、クウにもお願いして罰も免除した
ただひとつの条件として「もうクウに手を出すな」というのを出した

そして三人で旅立ってから、二日目の夜
ついに草原の奥の方に、街が見え始めてきていた

黒い服、黒いズボン、黒い眼、黒い髪
俺はそんな姿をしているから、姿は闇に溶け込んでよくわからない
と思われる

次に、鉄の軽鎧（兜なし）、黒髪黒目。背中には、はがねの剣
俺の友達、光蛇

軽鎧は本当に軽いらしく、なかなか素早い動きもできるし、着ていてもほとんど疲れないらしい
そして最後に……長く綺麗な茶髪に、輝く大きな黄緑色の瞳。茶色いボロマントに身を包んでいて、キツネの耳とキツネの尻尾が生えている

モンスターウィザードの少女だ
それがいまの俺達のパーティだった

「もう少しで街に着くぞ」

遠くを見つめながら、光蛇が言った

「そうですね」

クウもそれに同意し、黙々と歩いている
しかし俺は……

「ちょっと待て」

二人を引き留めた

「……なんだ？」

ひどくめんどくさそうな気持ちを目に込めたような視線を、光蛇
は送ってくる

当然そんなものスルーして、俺は言った

「なぜここまで来るのに、まったくモンスターと出会わなかったん
だ」

「そりゃ、モンスターのいない区域を比較的選んで進んできたから
な」

「だーから」

俺は机を叩くように手を振る

「おかしいだろ。どんなRPGでも街と村の間とかには必ずモンス
ターが出てきて、必ず戦うもんだろ？ どんなに頑張ったって、普
通はモンスターと出会わずにここまで来るのはRPGなら絶対不可
能なの」
「？」

クウだけがゆうつ、わけのわからなそうな顔をしていた

「それにお前はともかくとしても、クウや俺はまだ弱いんだよ。普通はモンスターと戦うルートを選ぶべきだろうが」

「でも確かりヨウスケさんって、Lv気分でしたよね？」

ちなみにクウにも職業バカのことは旅の途中で話した

「弱い敵に勝てば、気分的にはもっと強い敵も大丈夫かなって思えるようになるじゃん」

「……確かにそうですね」

だろ？ と俺はクウと納得し合って、光蛇を見た

「まあ……それは俺の不注意だった。だが仮にモンスターのいるルートを選んだとしたら、夜はどうするんだ？ 夜に襲われれば元も子もないだろう」

「すまない興味が無いんでね」

ちなみにこのパーティのリーダーは光蛇だ。前衛の突撃兵係が俺。後衛の支援係がクウだ

「いま非難してもしかたないですよ。また次に生かしましょう」

「そうそう、落ち込むなっ」

「落ち込んでないけど、とりあえずありがとな」

「ああ、そーいえば」

俺は街の直前で思い出したように言った

「クウ。耳は頑張ればだませると思うけど、さすがに尻尾は無理だ。どうにかして隠せないかー」

「あ、はい。そうですね。隠します」

そう言つとクウはウィンドウから服や髪の薄い茶色と同じ色のポロポロなとんがり帽子を取り出して、被る
尻尾はマントの中に丸めて隠したようだ

「それじゃまずは、宿を探すか」

この世界に来てからというものの、村などの拠点ではそこしか行つてないな

明日の朝は、どこか他も見て回ろうかね

そう考えつつも、俺は光蛇の言つとおりには街へ入って周りの宿を探した

宿は簡単に見つかったが、俺は眠らずに外へ飛び出した
だって、宿を探す途中にいろんなところを見かけたんだ
せつかくRPGの中に来たんだ。そういうところに行かなきゃ損だ
る？

というわけで、一人で出てきた

「とは言つたものの」

さて、どこ行くか

街は夜でも賑やかだから、とりあえず大半の所は営業していそうだ

「ま、酒場でも行くか」

なぜ酒場か。理由はいくつかある

武器屋、防具屋、雑貨屋など、RPG定番の場所はそこらにある
だが聞こう。そんなところ行って楽しいか？

答えは否だ。目的があるならともかく、ないなら行く必要はまっ
たくない

「……ちよつと待て」

俺は酒場へ向かう足を止めて、呟く

「通り行く無数の人々全員に名前があるんですけど。こういうのは
鬱陶しすぎていらないんだけど。しかもそのせいで遠くが良く見え
ないし」

まったく……これだからクソゲーは……
と文句を言っていると、酒場に到着した
その扉を開け、中に入る

「おお、意外としっかりしてるなあ」

中は普通のRPG風の良い酒場だった
床や壁は木で出来ており、無数の椅子や机には無数の人々が座っ
ている

ある人は戦士。ある人は魔法使い。ある人は幽霊。みんながみん
な、いろんな特徴を……

「ちよつと待て」

立ち止まり、呟く

「なんで幽霊が普通に何匹も酒場でたむろしてんだよ。そういうの

はモンスター扱いにしゃがね。どうしてこいつらみんな受け入れてんだよ……」

俺にしてはまともな意見だった
でもやっぱり俺は最後には

「ま、どーでもいいか」

と、なった

とりあえずマスター（そういうキャラ名だった）にコーヒー（超砂糖多め）を注文して、カウンターの席へ腰をおろす

そして適当に酒場のふいんきに「これこそがRPGの酒場だ……」
と言いながら納得していると、一匹の幽霊が話しかけてきた

同時にマスターからコーヒーも差し出される

「ねえねえ」

「ん？」

女の子だ。キャラ名と姿をチェックしておこう

キャラ名「リノ」。長い黒髪に赤い目、あと俺と同じような黒い服に、黒いマントを着た幽霊だ

そいつに俺は、言った

「服装パクんな」

美人と言うより、また美少女だ。まあ、クウよりは胸も身長もあるけど……幽霊だしなあ

「いや、パクってないよ」

「あと浮くな。羨ましい」

「すみせんつと」

少女の幽霊は足を地につけた
俺は「で、なに？」とは聞かない
だって興味ないし

「はあ……」

代わりに、ため息を吐き出す
だってさあ、最近美人と会ってないし、女の子と会ったとしても背も胸も小さい子供だし

「まったく、やっぱりこれはクソゲーだな」

最近このセリフ、口癖になってきたな

「ねえねえ」

「そつすね」

「まだなにも言っていないよ」

「そつすね」

「話ぐらい……」

「そろそろ冷めたか、コーヒー」

「聞いて……」

「砂糖多っ！ あと苦っ！ やっぱ苦手なものは飲むもんじゃないな」

「おーい」

「しかも目、覚めたし。これじゃ宿戻っても寝れるかどうか……」
「……」

無視は俺の特権である

だが男ならともかく、幽霊と言えどこいつも美少女だ話を聞くぐらいはいいだろう

「で、なに？」

閑話休題

次の日がやってきた
なぜ酒場の場面を飛ばしたかなどは気にするな。読者は黙って読んでおきなさい

「ふああ……」

……ねむ
昨日は遅くまで起きてたからなあ……全然眠れなかったくそ。あのバカ幽霊め……長い話に付き合わせやがって

「ん……？」

俺たちは4人用（3人だが）の大部屋を選択した
金は光蛇が初期に大量に持っていたらしく（ひいきだ）、平気だったのだが……

「なんであの二人はもういないんだ？」

一度持った疑問が、二つの出来事で解決した

一つ目。奇跡的に持つてこれていた腕時計を見ると、いまは11時だった（寝すぎ）

二つ目。机の上に「朝起きれもしないバカはずっと寝てろ。俺とクウは街を見回ってくる」という書き置きがあった

「死ねばいい、光蛇め」

あのクズが宿に帰ってくる前に外へ飛び出して、とりあえず指す宛もなく歩き始めた

「誰がバカだ。テストでは……いや、まああいつに負けてたけど……」

く……うまく悪口が言えない……

「くっそー……バカアホクズクソ光蛇があー」

子供みたいな悪口を言った後、はあと大きなため息をつく

「……酒屋にでも行くか」

昨日の夜。俺はあのヴァンパイアゴースト（もといりノ）クエスト依頼を頼まれた

「幽霊の館に最近出没するようになった吸血鬼を、いっしょに倒し

てほしいんだ」

もちろん俺は

「い・や・だ」

断った

「えー……」

「そーゆーのは、うちのパーティーリーダーに言ってくれ」

「君、ソロじゃないの？」

「3人パーティーの一人だよ」

「そっか……なら、だめだなあ」

なんかダメにされた

「なんでソロが良いんだ？」

一応興味持ったから、聞いてみる

「企業秘密」

死ねばいい。」とか付けんな

女、子供相手にそんなことを思ったことを一瞬恥じてから、口を開いた

「まあ、とにかく一人ならいいんだろ。明日の夜にでも宿から抜け出して一人で行ってやるよ」

「ホントッ!？」

「たぶん」

どうせあいつのことだから、何日かここに滞在するんだろ。なら、暇だから別にいいか

……それに、幽霊と言えど女の子と二人きりとか、デートっぽいしな

「やった！　なら明日の23時！」

「集まるのが遅すぎな気がするけど、まーいーや」

ということがあった

まあそんなわけでまだ酒屋に行く必要もないわけだが、行くところもやることもないなら仕方がない。もう一度行くしかない

もう強がってコーヒーなんか飲まないけどな。たぶん

そう思いながら、酒屋に辿りついて扉を抜けて中へ入った

コーヒー溢され事件

デュエル、もといPVPというものは知っているだろうか
対人戦、1対1形式のバトルだ

そしてそれがいま、まさに酒場で行われていた

この時ばかりは「サイコー」と喜んでいた俺だった

酒場の中央から机や椅子などがどけてあり、その真ん中には二人
の人間が戦闘を繰り広げていた

周りには数々のギャラリーもいる

「これこそRPGだ！」

さて、と。どんな感じかな

俺から見て左の相手は、赤い重鎧を体中に着込み、武器はメイス
の防御特化型戦士といった感じだ。しかたなく名前を見ると、バ
ルドと書いてある

対して、右の戦士は落ち着きのある格好の感じ良さげな奴だった
軽い茶色革装備を着込み、その上から青いマントを着ている。そ
れだけで、武器は鉄の片手剣だ

名前は……フィラード

「ふむ……」

目を凝らすと、バルドとかいうやつのはうはかなり疲れているよ
うに見える。対してフィ……ラード？ はあまり疲れてなさそうだ

「ちょこまかと……」

バルドが口を開く

「パワーには自信がないからね」

フィなんとかも言い返す

「……バルドとか言う奴は負け確定だな」

負けフラグ立ったし

さて、もうフラグのせいで飽きたからカウンターにでも行くか
俺は右から遠回りをしてマスターのいるカウンター席に腰をかけた
そして

「コーヒー。ブラックで」

まったく懲りてない俺であった

さて、と。勝負はどうなってるかな

とりあえずコーヒーが出来上がるまでは暇だから後ろをしてみる

「死ねやああああ!!」

雑魚っぽいセリフだぞ、バルド

バルドとかいうやつはメイスを振り回して……っていうか店内で、
んなもん振り回すな

しかしフィなんとかはそれを華麗に受け流しーそれで余計に床
に穴が空きー相手を疲れさせてゆく

「そこだっ!」

不意にフィなんとかが刃を突き出して鎧の隙間を貫く

「ぐ……だが……捕まえたぞ」

と、そこで動きが止まっていたフィなんとかの腕をバルドは掴んだ
クソギヤラリー共が騒ぎだす
そして思い切りメイスを……
と、そのとき

「なにをしているの」

誰かが入り口から店へ入ってきて、そのメイスを『素手』で受け
止めた

と、あとコーヒーが出来た

「待ってましたっ!」

もうあつちはどーでもいいや。コーヒー飲もつと

「誰だ、てめえは」

……やっぱ苦いな。砂糖入れてない分、昨日より苦い

「私のことはどうでもいいよ。それよりなにをしているの?」

せつかくブラックにしたけど、やっぱ砂糖入れようかな

「デュエルだよ。子供は帰って遊んでな」

いや、でもそれじゃせつかくブラック頼んだ意味がないじゃないか

「私は子供じゃない。それにそんなことを聞いてるんじゃない。どうしてデュエルが禁止されている場所でわざわざやっているのかを聞いているんだけど」

うーむ……でも飲めなきゃ意味ないよな

「マスターが了承してくれたんですよ」

よし、砂糖入れるか

「マスターが？」

えーと砂糖は……あつたあつた
4つくらい角砂糖を入れて……つと
と、そのとき

バンッー！

カウンターが力強く叩かれ、揺れる
そして……

「マスター。これはどういうことなんですか」

コーヒーが、こぼれた

「……………」

「それは……………」

こ、の、野郎……

「きちんと説明を「おい！てめえそこの子供！」」

俺は立ち上がり、大人げもなくそいつへ向き直った

髪は水色で長く、上着から少しはみでるほどだ。目は子供のよう
に大きく、水色に輝いている。あと俺より頭半分くらい小さかった
俺もまああまり背が高い方じゃないけど、まだこいつはそれより
小さい

服は、帽子が付いた黄土色の上着に藍色の服とスカート

しかしそんなことどーでもよかった

相手が子供でも大人でも警察でも勇者でも大魔王でもコーヒーを
こぼされれば絶対怒るから

それに前にも言ったけど、俺はロリコンじゃない。美少女じゃな
くて美女派だ

「……なに？」

このちんちくりんの子供はめんどくさそうに言った

いつもなら全部受け流して話を聞かない俺でも、今は話を聞く
コーヒーの恨みは恐ろしいんだ

「俺のコーヒーを返せっ！」

「……コーヒー？」

「そーだ！いま、この大人ぶってるちんちくりんな子供がこぼし
たんだよ！お前が」

「大人ぶって……」

なんか青筋が浮かんてるけど、んなもんどーでもいい

「いーからどーしてくれんだよ！」

「傍観者がなにを「うっさい黙れ」」

「どうしてデュエルを放つ「うっさい黙れ」」

「話を「うっさい黙れ」」

もつと青筋が浮かんできたように見えたが、そんなのはさっきも言っただろーでもいい

「……今はあんたの相手をしてる暇はない」

深呼吸をしてから子供が言った

「黙れチビ。子供は大人の言うことを聞いてろ」

「チビ……」

さらに青筋が浮かんだ

「誰がチビだ！ 誰が子供だ！ 誰が大人ぶってるだ！」

そしてついに切れた

「お前だよ。子供は家に帰って引きこもってる」

そして自宅警備員にでもなればいい

「お前……！！ 私にはルー・シウラシベルという名前がある！
子供じゃない！」

「背が小さくて性格が子供っぽければ子供だよ、ルーちゃん」

「誰がルーちゃんだ！ もういい！ お前、表へ出る！ 叩きのめしてやる！」

「子供と戦うなんて、できないなー」

「このっ……！！」

と、そんなとき

「はいはい、お静かに」

誰かがまた酒屋に入ってきた

まあどーでもいいか、そんなこと

「私は子供じゃない！ そんなに言うんだったら、今ここで……！」

と、空中に手をかざしたルーちゃんの腕を誰かが掴む

「治安を維持する者が治安を乱そうとしてどうするんですか」

そして俺の肩も、誰かに掴まれた

「大人げないぞ、霊介」

「……光蛇？」

後ろを振り向くと、左肩に手をおいている光蛇とその後ろのクウの姿が確認できた

「す………すみませんでした………」

あの子供は変なおじさんに頭を下げていた
そしてそのおじさんが言う

「では……まずは状況を説明していただきましょうか」

「コーヒーこぼされたっ！」

はい。説明終わりつと

「なるほど」

おっさんもわかってくれたみたいだ

「つまり、このルーが違反をしていた酒場を見つけ取り締まり始めたところ、間違えてあなたのコーヒーをこぼしてしまった。といった感じでしょうか？」

知らん。知るかそんなこと

「まあ……そうですね」

ルーちゃんは頷く

「なら、謝りなさい」

おっさんがルーちゃんに言った

「え、でも、こいつ……傍観者ですよ？」

「第三者を巻き込むんじゃないと、いつも言ってますよね？」

「う……」

「さあ、謝りなさい」

「……すみませんでした」

いや、謝罪なんてどーでもいいんだよ！

「コーヒーを返せっ！」

問題はこれだ

「コーヒーくらい俺が奢ってやるから。な？」

光蛇がなだめてくるけどウザいから無視

「そうですね……なら、こっいつのはどうです？」

どーいつの？

「このルーと、そのリヨウスケさんがデュエルする、というのは
「え。やだよ。めんどくさい」

なんでそんなことしなくちゃいけないんだよ

「あなたが勝てば、コーヒーを何杯でも奢って差し上げましょう」

「よし早くやろう」

そうと決まればバトルだ！

「だが君が負けたなら、少し私たちの任務を手伝って貰うでしょう」

「おーけー。どーせ子供に負けるわけないし」

「ルーも、それでいいね？」

「……はい、隊長」

あ、そーいやこいつの名前まだ確認してないな

……いざ見るとなるとめんどいからどーでもいいーや。俺も隊長って呼ぶことにしよう

「なら、この違反はどうするんですか？ 放っておくんですか？」
「いや、それは俺がなんとかしておこう」

光蛇が声を出す

「そうですか……では、頼みましたよコウタさん。来てください、ルー、リヨウスケさん」

「はい」

「はいはいっと……クウも来るか？」

……忘れ去られてた存在を今思い出した

「はい。見学します」

そうして、光蛇を残して俺たちは酒場を出た

たどり着いた場所は、広場だった
ギャラリーもたくさんいるけどウザいから全部無視

「ここで戦ってもらいましょう」

その言葉にルーちゃんは反論した

「え、こんな人目の付く場所ですか？」

「障害物もなく、戦いやすいだろう」

「それは、そうですね……」

ルーちゃんは周りの視線を気にしていた

「あー。俺もなんかやだなあ。子供を虐めてるみたいで」

「やります、隊長。この失礼な弱つちいやつを皆のさらし者にしてやります」

あれ？　なんでいきなりやる気全開？　いまさっきまで嫌がってたのに

……まあどーでもいいや

「そうか」

隊長はそれを笑い、右手を上げた

「ここが中心だ。ここから3メートルずつ反対同士で向かい合え」

「はい」

「はいはい」

言われた通りにする

「次に、各自ウィンドウを開き、『対戦』表示を押せ」

言われた通りにする

「そして一対一の半減決着を選択し、相手を指させ」

言われた通りにする

「すると対戦申し込み画面になったはずだ。それに『はい』と答え

る」

言われた通りにした

「すると1分のカウントダウンが始まる。それが0になった瞬間が、デュエルのスタートだ」

半分聞き流しながら言う通りにしてただけだから、もう一度同じことやれと言われても無理だからな

「私の職業はブレイブハンター。Lvは31だ。お前は？」

「……あー、俺？ Lv不明の職業シーフ（仮）」

「……ふざけてるの？」

「これがおふざけだったらどんなに嬉しいことが」

職業バカのLv気分なんざくそくらえだ

「あと10秒」

隊長の声が聞こえると、ルーちゃんは手を前にかざして構えた

「……」

俺も腰の短剣に手をかけた
そしてカウントが、0になった

コピー溢され事件（後書き）

はい、次回本格的な戦闘シーン入りまーす

まあ……あんまり期待はしないでください

初めてのデュエル（前書き）

はい。バトルシーン入りまーす
……あんまり期待しないで、ね……

初めてのデュエル

確か、前に少しだけ話していたと思う

確か……クウと初めて会った時にみんなに話した

実戦は初めてだが、戦いは初めてじゃない……って言うといった記憶がある

その理由をちようどいいから今話そう

元の世界で、俺の先輩に剣道の達人がいたんだ

男だけど、尊敬して……で、いつも剣道で戦ってた

普通に正直に剣道やれば勝てないだろうから、長刀と小刀を用いる二刀流の小刀だけで戦ってみてはどうだろうか、という考えでいつも戦っていた

いやー……強かったなあ

いつも負けてたし

とまあおしゃべりはこのへんにしておこう

「さて、と」

俺は短剣を抜き出し、右手で器用に回してみせる

ちなみにこの短剣、小刀並みに長いから扱いやすい

「お先にどーぞ」

先手必勝、とよく言うけど相手は子供だからなあ……先手は譲るとルーちゃんがかざした手でなにかを握るようにして

「アタック」

と呟いた

するとかざした右手の中に青白いオーラの持ち手が形成されていき、やがて実体のない青白い大剣へと姿を変えた

「アタック、か。確かブレイブハンターの専用スキルだったな」

いつのまにか戻ってきていた光蛇が解説を始めた
ウザいけどここは聞いておこう

「魔力（MP）で形成された武器だ。その威力はINTとSTRに反映して高くなる。つまりは、Lvが高いほどより強力になる。気をつけるよ、霊介」

なんでそんなこと知ってんだよ、お前

まあいいや

「プロテクト」

次は薄い青白いオーラがルーちゃんの体全体を包み込んだ

「あれもブレイブハンター専用スキルだ。確か、体中に魔力の壁を纏ってVITとWISを圧倒的に上げる効果だ。だが攻撃を受ければ受けるほどMPは減少する。霊介、まだブレイブハンターには3つの専用スキルが残ってるらしいから……油断するなよ」

もうウザい。なんなんだよあいつ。実は途中から聞き流してた

「行くよ、雑魚」

「早く来いよ、子供」

ルーちゃんが走り込んできた
速さだけで言えば、確実に光蛇は越えてるだろうな

「どうするかな……」

まずは様子見でもしておこうか……
距離はすぐに詰められ、魔力の剣が勢いよく横なぎに払われる。
しゃがんで避ける

外れた剣の勢いを殺さず、ルーちゃんは腰へ剣を寄せて瞬時に突きを繰り出す

短剣で弾く

……弾こうと思ったんだよ

「おもっ！」

意外にも魔力の大剣は威力が高かったらしく、弾くどころか弾かれた

そしてその刃が俺の腹に刺さる

「痛いな……」

「余裕そうだね。さっきも、今も」

「油断してたかも、な」

「早く本気でおいでよ。私もまだ、本気じゃないよ」

今わかったことだけど、デュエル中は相手のHPが確認できるみたいだ

「……」

それに、これも今気づいたことだが……自分のHPやMPのことを考えると、その数値が頭に浮かんでくる

いま俺のHPは、1/10くらい減っている

まあ直撃したしな

……あれ？ つまりこれはあれか？

1/10くらい諦めかけたってことかね

HP諦めるまで、だしな

「よつと」

とりあえずバックステップをして腹から剣を抜きつつ距離を取る

「……」

……しかたない

本気、出すか

頭が冴えてゆく

神経だけが無駄にとぎすまされ、雑音が頭の中から消え去る

久しぶりの、感覚だ

先輩との真剣勝負以来だ

どうでもいいなどという雑念を消し尽くし、全てを目の前の出来事に集中する

そして目を大きく見開き、ターゲットをひとつに絞る

ルー・シウラシベル1人に、ターゲットを絞る

「……行くよ」

俺が真剣なのがあったのか、ルーちゃんからもふざけた態度が

消えたのがわかった

横なぎに払われた大剣を、短剣を構えつつしゃがんで避ける
そしてルーちゃんが腰に大剣を構えた瞬間に、全力の速度で突っ
込み短剣を振り回す

「……」

手ごたえが、あまりない

これがきつと光蛇が言っていたプロテクト、魔力の壁なのだろう
と、大剣が俺の顔めがけて突き出された

俺は左腕で自分の左側の体を思い切りたたき、無理矢理体を右に
逸らせる

俺のすぐ横を過ぎ去った大剣……いや、それを持っていた右手へ
瞬時に短剣を突き出す

しかしルーちゃんは大剣を右手から離して、引いてそれを回避
落ちた魔力の塊である大剣がなくなる前に、すぐさま次は左手を
前へと延ばし、ルーちゃんの右腕を掴む

そうして、新たな攻撃を封じる

左手はこの際放っておいて、俺は掴んだルーちゃんの右腕をこち
らに引き寄せながら、右手の短剣を払う

見事クリティカルヒットし、プロテクトに守られていながらもル
ーちゃんのHPが目に見えて減少する

さらに離れかけたルーちゃんの右腕を引き寄せて、今度は突きを
繰り出す

しかしその瞬間

「プロテクター」

ルーちゃんの左手が短剣の剣先へと瞬時に持っていかれ、その短

剣がまるで見えない壁に当たったかのように、左手に当たる直前に空中で弾かれた

そういえば……酒屋でもこいつ、素手でメイスを止めてたな

このプロテクターとかいうスキルの効果か、あれは

と、さらに弾かれて怯んでいる俺の体にルーちゃんは左手を突きつけて、言う

「アタッカー」

なにかに貫かれた

そんな感覚しかなかった

状況を判断するのに、1秒は使った

ルーちゃんの左手から不可視の魔力の剣が形成され、それが俺を貫いた

つまりそういうことだ

「っ！」

しかも結構な威力だ

俺はルーちゃんの左腕を離し、後ろへ2メートルほど吹き飛ばされる

HPは……残り7/10くらいか

ルーちゃんはまだ8/10くらいだ

半減決着だから、もうすぐか……

「不可視の剣に、不可視の盾、か」

それに、魔力の鎧

圧倒的だぞ、これ……

……あ、いまHPがちよっとだけ減少しやがった

諦めかけたからか、いかんいかん
もつと集中しろ……

……こいつに勝てる可能性と言えば

「やっぱ、デザートイグルDEかな」

ちなみに、DEは道ばたに落ちてたのを拾っただけだ

説明書まで付いてたんだよなあ

確か……MPを消費して、弾丸が物質化。それが勝手にDEに補給されるから、リロードの必要はないとかなんとか

まだ一度も使ってない反則級スキルは、今は使うべきじゃないだろう。あれは本当に危険なときじゃないと危ないからな

「どうするの？ 降参する？」

「まさか」

さて……第二グラウンドスタートだ

「アタッカー、アタック」

ルーちゃんが呪文を唱えると、その右手に青白い魔力の大剣、左手に不可視の大剣が形成される

「勝ち目が無いのに戦うなんて、あんたはバカかな？」

「ご明察。職業バカです」

「勝ち目がない、とは言い切れないよ」

DEは…… まだだ
まだ、使わない

「今度はこつちからっと！」

俺は走り出す

短剣を構え、相手の左手のみに意識を集中させる
左側から青白い大剣が迫ってくるのがわかる

俺はそれを確認せず、半ば勘だけで跳んで避ける

そして、相手の左手が動き出す

不可視の大剣…… 見えない武器なんてチートくさいが、手の向き
やらに集中すれば避けられないこともない…… たぶん

未だ空中にいる俺に、右下側から（たぶん）大剣が振り上げられた
それを短剣で斜めに反らすと、火花が散る

「ビンゴ！」

見事受け流した後、着地時に短剣をルーちゃんの頭に向けて突き
刺す
が、

「プロテクター」

青白い大剣を持ったままルーちゃんの右手が上に持ち上がり、そ
の右手の甲に短剣を弾かれた

「まだまだ！」

着地場所を調整してルーちゃんの真後ろに着地し、振り向き様に
短剣を繰り出す

しかしそれを読んでいたらしいルーちゃんは前に足を踏み出し、紙一重でそれを避ける

さらに振り向きながら左手を……いや、不可視の大剣を振り回してくる

反応が遅れ、短剣で弾こうとしたが、さっき逆に弾かれたことを思い出した

そしてまた短剣は弾かれ、その不可視の大剣が俺を斬り裂き、吹き飛ばした

まだ俺が空中で飛ばされている間に、さらにルーちゃんは青白い大剣の剣先を突きつけ、呪文を唱えた

「ウィールズ」

俺の着地と同時に、その剣先から青白い高速な魔力の塊が飛び出された

それを短剣で防ぐ

だが、また吹き飛ばされた

「ぐっ……」

今HPどれくらいだ……

一応ガードしてるからそこまでダメージは酷くないはず……

「……もう残り6/10、か」

まずい。ヤバい。あと一撃でも食らったら……

「もう一度聞くよ、降参する？」

「うっさい黙れ」

「負けを「うっさい黙れ」」

さて……どうしたものか

「なら、正々堂々負けてればっ!」

ルーちゃんが突っ込んできた

まだなにも思いついて無いというのに、空気読めよ

「あ」

と、そんなとき

ルーちゃんが自分の足に躓き、転んだ

「……えーと」

……とりあえず、攻撃しとくか

DE出して、よく狙いを定めて……引き金を……

「ぶ、プロテクター!」

引くつと

ガウンッッッ!!

銃弾はプロテクターを貫き、プロテクトを貫き、ルーちゃんに直撃した

そして、HPを一気に1/2……5/10ほど削った
プロテクターとプロテクトに止められていたというのに、なんて

威力だよDE

「……あれ」

よく見ると、俺のHPも3/10くらいまで減っていた

……どうやら不可視の大剣が転んだ拍子に飛んできて、消える瞬間に俺に刺さっていたようだ

「……」

それは、つまり……俺の方が先に残り1/2をきっていたのだから……

「勝者、ルー・シウラシベル」

俺の、負けかつつ！

………こうして初めてのデュエルは終わりを告げた

初めてのデュエル（後書き）

あっけない終わり方でしたねー……………すみません。でも元々決ま
ってたことなんです

その名はカカシ

「くそ……出し惜しみせずに最初からD E使ってればよかった……」

俺、クウ、光蛇、ルーちゃん、隊長（本名はエヴィ・レストビー
ンで21歳だったらしい）はとりあえず近くのカフェっぽい店に入
って、いろいろと会話で花を咲かせることとなった

コーヒーも弁償として一杯だけ奢ってくれて結果オーライだ

「その、でざーといーぐる？ というものには興味がそそられます
ね。あんな超威力を持つ武器など、そうそうありませんよ」

「あー。まーいーや。コーヒー戻ってきたし」

「おい、靈介。顔を上げる。話を聞け」

「あー、でもやっぱ苦い。クウ、そっちの角砂糖入った缶よこして
ー」

「はい」

「ありがと」

「聞ってるの？ 無視をするな」

4つくらい入れるか

「さすがに甘すぎるかな……」

まあいいか

「リョウスケさん？ 聞いていますか？」

「ん？ なに？ ああ、砂糖やっぱ入れすぎたと思うか。でも入れ
ちやったもんはしかたないって」

「いやそんなこと聞いてないよ……」

「砂糖、私も食べたいです！ そのままで！」

「はいよ、クウ。あんま食べ過ぎると体に悪いからな」

「クウもいっしょになるな…… 霊介、いいかげん話を……」

「ふむ、砂糖をいくら入れようが元々コーヒーが苦手なのだから意味なかったか。迂闊」

「…… もういいや。どうせこいつのことだ。話を聞く気はないだろ」

光蛇は諦めたらしく、ルーちゃんと隊長の方へ向き直って言う

「すみません。この二人は放っておいてください。バカには無理に聞わない方が賢明です」

「なんか失礼なこと言われてますよ、リョウスケさん」

「ほっとけ。自分もバカだと気づかせないのも優しさだ」

コホンツと、光蛇が無駄に大きく息をつく

「まあ、いいでしょう。まずは自己紹介から始めましょう。僕の名前はエヴィ・レストビン。Lv37のアイスバスターです」

「ルー・シウラシベル。Lv31、ブレイブハンター」

「俺は香川光蛇。Lv38のフレイムバスターです」

「香川、光蛇さん……？ 不思議な名前ですね」

「まあそこは気にしないでください。こちらの二人は青柳霊介とクウ・バルハルト。バカとLv6のウィザードです」

「なあクウ。もっとオブラートに包む言い方はないのかな」

「例えば…… 天才の反対、とかですか？」

「包まれてないなあ」

まあ、さりげなく光蛇はクウがモンスターウィザードであることを隠してくれるみたいだな

「バカ……」

ルーちゃんが笑ってたけど、笑顔が新鮮だったからとりあえずあえて無視してあげることにした

「なるほど。この中では、光蛇さんがずば抜けて強いわけですか」
「光蛇はパーティリーダーだしなあ」

フォロー入れとく

「いや、たぶん俺は……霊介よりは弱いですよ」
「私に負けたのに？」
「こいつが本当に本気になったところなんて、俺はまだ見たことがない」

「なーに言ってるんだよ。俺はいつでも本気だZE」
「なるほど……確かにルーと戦っていたとき、一度もスキルを使いませんでしたしね」

使わなかったというより、使えなかったただけだけだな

「……」

ルーちゃんが不服そうな顔で俺を見た

「大丈夫だ、問題ない」
「いきなりなんですか、リョウスケさん」
「いや……まあ、ノリに乗って」
「霊介、話を逸らさないでくれないか」

なんかまだまだ話が続きそうだなあ

めんどくさい

「そのDEという武器には興味がそられますが、それは今は置いておきましょう。リヨウスケさん。負けたときは私たちの任務を手伝うという約束を、覚えていますか？」

え、そんなのしたっけ

「……もも、もちろん覚えてるよ」

「そうですね、それはよかった。あなたに、私たちが今倒そうとしているモンスターの狩りを手伝ってほしいのです。私の部隊は7人構成なのですが、なにぶんそいつに5人が医療所送りになってしまいましたので」

「回復魔法で治らないのか？」

光蛇が質問する

「あいにく、少し特殊な状態異状にかかっておりまして。治るのに一週間はかかります。みなさん、支部で寝ております」

「そういえば聞き忘れてた。あなたたちは、何者なんですか？」

「私たちは、ギルドMSCの第三部隊だ」

「MSCというのは、まあ治安維持団体の略称らしいですね。よくは知りませんが」

「……おい、霊介」

光蛇が小声で話しかけてくる

「このゲーム……いや、この世界に英語なんて存在したか？」

「確か無かった気がする」

「……なら、こいつらのギルドの設立者は元の世界に関係している、

とは思えないか？」

おおなるほど
でも

「興味ないっす」

「……お前は幸せだな、いつも気楽で」

そう言つと光蛇は隊長とルーちゃんに向き直る

「そのMSCというギルドには興味があります。一度、団長と会つてみたいものです」

「「え」「

二人は口を揃えてそう言い放っていた

「やめた方が良いと思いますよ……」

「うん……会わない方が身のためかと……」

「……どういう、ことですか」

「……治安維持団体と言つても、このギルドは団長が遊び半分で作ったものなの」

「団長はなにもせず、ただ治安を守れと、言うだけです。大事なことは親衛隊にやらせます。そしてなにより……」

二人は一度顔を見合せて、言う

「「性格が最低です」「

……ルーちゃんとはかくとして、隊長までそう言つんだから相
当なんだろうなあ

「……………」

光蛇もそう思ったようだ

「MSCの他に、どんなギルドがあるかわかりますか？」

そして会うことを諦めたようだ

「そうですね……三大ギルドというものがあまして、MSCはそのひとつです。その三大ギルドの『アーミー』を頼ってはどうかようか」

「もうひとつじゃだめなのか？」

「あいにく、悪人ギルドでして」

「なるほど……なら、そのギルド名だけでも教えてくれませんか」

「『リビングデッド』です。意味は知りませんが」

「……また、英語か」

リビングデッド……確か、生きている死者、とか、ゾンビみたいな意味だったな

「なあ光蛇」

「なんだ」

「アーミーも英語じゃないか？」

「……意味は？」

「確か……『軍』」

「よくそんなことわかりますね、リョウスケさん」

「俺たちはクウたちが住むところより、もっと遠いところから来たからな」

「軍、か」

「軍という意味だったんですか……そのような意味を理解できるとは、コウタさんたちはなにものなんですか？」

「……」

「……まあ、詮索はやめておきましょう」

「本題に戻りましょう。その、討伐をまかされているモンスターについて聞かせてください」

まだ話続けんのかよー

「そのモンスターは、HPもMPもINTも……ほとんどのステータスが限りなく低いんです。ですが……」

「ある能力値が、極端に高い？」

「そうです」

「あいつには、私たちの攻撃がなにひとつ通じなかった。圧倒的なVITとWISを、そのモンスターは備えている」

「攻撃力であるSTRやINTは、そこまで高くはありません。いや、むしろ低い方です」

「だけど……そのスピードであるAGIの高さと、防御力であるVITとWISの高さは、まさに圧倒的」

「HPは高くないので、一度でもクリティカルヒットさえできれば、思ったんですが」

「……クリティカルヒットが出ないような魔法がかかっていた？」

「バカ言え光蛇。きつとなにも食らわなかったんだよ」

「クリティカルヒットでそれはないだろう」

「いえ……リヨウスケさんの言うとおりです」

「……え？」

「クリティカルヒットは、何回も出たの。だけど……あいつのHPは、1ドットも減っていなかった」

奥歯を噛みしめながら、ルーちゃんは言っていた

「その名はカカシ……か」

光蛇が、なんか呟く

俺たちは一度別れ、一時間後、街の入り口に集合ということになった

一日で往復できるらしいから、夜の約束にも問題はない、たぶん

「カカシってカラス避けの道具じゃなかったっけ」

「だな、なにか関係があるのかもしれない」

「カラス、ってなんですか」

「ブラックバード」

「無駄にかっこよく言わなくてもいいだろ霊介。それにカラスという意味じゃないぞ、その単語」

うるさい黙れ

「あー、そういやこの世界って英語がない設定だったか。なら、いまのクウには意味わからないか。じゃあ……漆黒の怪鳥」

「え！？ そんなのに簡単にカカシさんは勝てるんですか!？」

ん。この世界にカカシはないのか

「凄いぞ、目からビーム出して丸焼き……じゅる」

やべえ、なんか食べたくなってきた。鳥の丸焼き

「そ、そんなことができるんですか!？」

クウはもの凄く好奇心旺盛な目で、笑顔で言う
……ん

「クウ、尻尾」

「え……あっ!!」

すぐさま左右に揺れていた尻尾をボロマントの中に戻す

「あ、ありがとうございます。気づいてくれて」
「俺はなにも……いや、どーいたしまして」

せつかくお礼言ってくれてるんだし、遠慮するのも悪いな

「へえ……」

光蛇がなんか言ってる。ウザいから無視

「あの謙虚な霊介が、簡単にお礼を受けるとは」
「うっさい黙れ」

「ここまで育てた甲斐がありました」

「いや、クウに育てられた覚えはないし、逆に育られたとしてもク
ウが育てられる側だろ」

「いや、霊す「うっさい黙れ」」

「えー。それはないですよ。私、こう見えて年はけっこう上なんです
すよ?」

「へー。何歳?」

「女の子に聞「うっさい黙れ」」

「12歳です!」

「……予想より上だった」
「ですよっ!」

悪い意味でな……

「お「うつさい黙れ」」

「リヨウスケさんは何歳なんですか?」
「ん、16だったかな」

たんじょーび、いつだったっけかな

「俺は「うつさい黙れ」」

「え……私より年上ですか!?」

身長差でわかるだろ

「し「うつさい黙れ」」

さて、とりあえず昼食を食べに宿へ戻ろっかね

「宿に戻りましょう、リヨウスケさん」

お、シンクロした

「あいよ」

「お「うつさい黙れ」」

そうして俺たちは宿に向かい、部屋へ戻っていった

いざ、登山――！

宿で昼食を食べ終え、街の入り口に向かう

そんなに遠くないし、まだ時間も余っていて着いた後は暇そうだ

「りよ「うつさい黙れ」」

あと50mつてところか

「まだ20分前ですけど、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「一番い「うつさい黙れ」」

まあ、着いたらモンスターハン。ーの如く、短剣でも研いでるか
えーと……名前なんだっけ。確か……そう、ルーちゃんとのデュ
エルで負荷ばかり掛けさせてたからな

初期装備並みの攻撃力と耐久度だし、そろそろ限界じゃなからうか

「着い「うつさい黙れ」」

「着きましたね、リヨウスケさん」

「20分前に着いても意味ないけど」

さて、研ぐか

とりあえずそこらへんの石を拾い、短剣を取り出す

「……」

ヒビ、はいつとる

まあ、きっと大丈夫だろ。研げばなんとかなるって

バキッ

「あ」

ふつうに折れた
やべ。どーしょ

「あれ、早いですね」

つと、隊長がきたっぽい

「揃ってるなら、いいわね。早く行こう」

ん、なんか行く空気っぽいな
だがここで、「空気読まない」スキル発動！「読めない」ではなく「読まない」だ

「短剣折れた」

折れたのを差し出す

「ふむ、それは困りましたね」

「お「うつさい黙れ」」

「ルー。リヨウスケさんに予備の武器を渡してください」

「どうしてこいつに……」

「おそらく、ルーとのデュエルときに傷ついていたのでしょう。
この任務の間だけ、貸してあげてください」

「別に嫌ならいいよ。素手でも十分」

「……わかった」

しぶしぶ上着の後ろに装備していた短剣を渡してくれる
表示武器名は、「ベースナイフ」

俺が元々持っていたものより、15cmくらい小さい

「ん、ありがとう」

受け取って、ベルトに掛けていた折れた短剣の鞘を外して、ベースナイフを鞘ごとさげる

「ふん……」

そしてルーちゃんはそっぽを向く

「では、行きましょう」

そうして俺たちは、北の方向へ向かった（俺たちは西から来た）

その後、光蛇の「とりあえずごめん」により発言権を返してやり、
3kmほど進んだ

「おお」

するとすでに目の前には、大きな瓦礫だけでできた山が存在していた

高さは……500m前後かな。よくわからん

「いいんじゃないかな。この山もよくできてるしね」

「ここが、カカシの生息地です」

へえ。畑じゃないのか

「靈介」

「ん」

「クリティカルヒットも通じない、ってこの人たちは言ってたよな」

小声だ

「うん」

「もしかして、ポケッ。モンスターの又ケニンみたいなものなんじゃないのか？」

あー。それ俺も考えたわ

でも違うんだよね。来る途中隊長に聞いたけど、全属性試したって言ってたし

「違うらしい」

「なにやってるの、行くよ」

ルーちゃんが俺たちを呼んだ

「疲れた」

「疲れましたね」

「疲れたな」

「そうですね、疲れました」

「……まだ、平気」

やせがまんはそのへんにしときなよルーちゃんや

「一度休憩しましょうか？ 頂上までまだ距離がありますし」

「そうだな、全力で戦えるように健康を保つのも大切だ」

というわけで休憩になり、みんな日陰に入ると、その場に座り込む

「隣座るな」

ルーちゃんのそんな発言を無視して、俺も座る

「座るなって言っただけど」

「なあ、力カシどんなやつなんだ？」

「話を……」

「藁でできた人型だと親近感がある！」

「……力カシは人型。あんたの予想はどうかしらないけど、体は白い金属だったよ」

「ふーむ」

「それからあんまりこっちに寄らないで、あっち行け」

「白い金属かぁ。それって銀とか？」

「………違う。副団長の話だと、メガホワイトミスリルとかいうものみたいらしいわよ」

「ほー」

「……」

ルーちゃんが無言で遠ざかった

「ふむ」

なぜ遠ざかったんだ？

「なぜ遠ざかったんだ？」

あ、思っただけのつもりが口から出ていたっばい

「あんたが嫌いだから」

「ふむ」

ま、自分で聞いていてなんだけど、どーでもいいーねそんな理由

「あんたも、私のことは嫌いでしょ？」

「え、なんで？」

「なんでって……」

「もうコーヒーは帰ってきたし、それに短剣も貸してもらったし、なんでそんなやつを嫌いになるんだ？」

「……え？」

「そろそろ、行きましょうか」

隊長が立ち上がったので、みんなもそれに習う
さあ、もうすぐちょーじょーだ

「あれ、マグマがないぞー」

「当たり前だ。ここは火山じゃない」

「ついに頂上ですね」

「……」

「さて……カカシは……どこにいますかね」

頂上まで登りきった。少し暑くて汗が出るくらいだから、富士山のように寒くない

太陽が少し西に傾いてはいるが、まだギリギリ、夕方じゃないただひとつの気がかりと言えば、休憩後からルーちゃんの様子が少しおかしいくらいかな。なんか無言でうつむいてる。なにがあつたんだろーな。見当もつかない

まあそこまで気にならないからどーでもいいーが。

「……いました。あれです」

と、隊長が瓦礫の奥を指さした

「んじゃ行きますか」

「あ、おい、霊介！」

「い、いきなり正面から行くんですかー……」

「……」

「大丈夫ですよ。あいつは、触らない限り反応しませんから」

「「……え」」

「やばいぞ……早く行かないと」

「リョウスケさんなら、絶対にみんなを待つなんてことはしません！」

「……早く行きましょう」

「……」

大きさは、高さ3mくらいだろうか。真っ白い体で、規則的な未

来的機械のような体だ

人型で、足は20cmくらい浮いてる。ドラ。もんみたいに浮いてる

だけど、どこぞの自宅警備員みたいにうずくまっていた

「ふむ」

先手必勝っ！

「あぶりだしっ！！！」

ベースナイフを取り出し、勢いよく切りつける
はじかれたが

そしてこいつが、カカシが、こつちを向いた

「そんな装備で大丈夫か？」

自分の体を見おろしてから言う

まあ、初期装備並みの防御力だけど……いいか

「……」

それに作戦なんてものも皆無。まったくこれっぽっちも、毛ほども考えてないけど、まあいいよね

「大丈夫だ、問題ない」

ん。後ろを見るとみんなもこつちに向かって来てるな
……さて、と

ボスバトル、スタートだ！！

いざ、登山！！（後書き）

次はボス戦です

VSカカシ(1)(前書き)

今回いつもより短いです

ギリギリ右に跳んで避けて回避
つか隊長。長々と話すなっ！
いつ動いていいかわかんなかったじゃないか！

「プロテクト、アタック、アタッカー」

後ろから規則的な声が聞こえて、俺も真剣になろうとつとめる

「フレイムアップ」

光蛇も、なんか唱える

「アイスアップ」

隊長も、なんか唱える

……いや、俺はなんも言わないからな！？

「ま、そのかわり……」

左手でDEを取り出し、構える。右手にはベースナイフもある
そう、つまり……最初から本気だっ！

「先手必勝、後手必敗！」

DEを力カシに向ける

「……あれ？」

いな、い？

「靈介！ 上だ！」

「っ！？」

勘で前に飛び出す

すると元いた場所には白い塊のように丸くなっていたカカシが降り注いだ

「あぶなっ！」

確かに、A G Iも凄いな……気がついたらなくなってたし

「はっ！」

威勢の良いかけ声と共にルーちゃんが切りかかる

「ウウ？」

その攻撃はカカシに見事ヒットするが、跳ね返される

……HP見えないから減ったかはわかんないけど、たぶん減っていないな

だってこいつ、このボスモンは攻撃に気づいていながらわざと受けたっばいし

「ちっ、アイズドライブ！」

隊長の氷を纏った剣の二連撃も効果が見られない。すげーな

「フレイムスラッシュ！」

光蛇の、炎の衝撃波もまるで効果がない

「……やっぱり、これじゃなきゃだめか」

左手を、DEを持ち上げて、言う

「ウァウ！」

っと、やべ

「っらあー！」

カカシがクウを狙ったので、即座に間に入って攻撃をベースナイフで受けとめる

「っと」

少し後退しただけで、受け止められた
たしかにSTRは低いな

「クウ、平気か？」

「あ、ありがとうございます」

クウはまだLv6だからな。実戦は、まだ早い

「下がってて」

「……は、はい」

なんだか落ち込み気味に声が帰ってきた
あー。いっしょに戦いたいのかな？ だとしたら、近いうちにし

VUPを手伝わないとな

「……」

ただまあ、今回はだめだけどな

「頑張ってください、リョウスケさん」

「あいよ、頑張る」

とりあえず、応援がいてくれるだけでも心強いや

VS カカシ（2）

「霊介、隙があればどんどん撃ちまくってくれて構わない。ただ、最優先はクウの護衛だ、慎重に攻めてくれ。エヴィさんとルーさんは守りに徹してくれ。こちらの攻撃が効かないなら、攻撃しても意味はない」

光蛇がどんどん指示を出す

「ただ、ずっと攻撃しないのもまずい。俺が基本的に引きつけるから、エヴィさんとルーさんは、守りの必要がないときは、普段、攻撃していなかったところを当たってくれ。もしかしたら、急所があるかもしれない」

…… 光蛇ってこんな頭良かったっけ

「ひとまずはそれで様子を見ながら戦おう。急な作戦ですまないが、引き受けてくれ！」

そう言って光蛇はカカシへと斬りかかった

「…… 凄いですね、コウタさんは」

「ああ、あいつあんな頭良かったっけかなー……」

「戦場で心が落ち着く、というような才能は喜ばしいことです。大体の人たちは、そんな才能を持ち得ていません」

「完全な指令棟向き、か。やっぱりあいつがパーテイリーダーでよかったんだなー」

まあLVの高さで決めただけだけ

「そういうリヨウスケさんこそ、落ち着いていますね」

「いや、マイペースなただけだ、って母国では師匠の先輩とか幼なじみに言われまくってたな！。そーいう隊長さんこそ、落ち着いてるじゃん」

「落ち着きがなければ、隊長なんてつとまりません」

そりゃそーだ。どんなゲームでも命令を出す奴がしっかりしないと、最弱になるからな

「っと」

カカシが俺に攻撃してきたから、ベースナイフで防御

「いけっ」

ガードしきった後、DEをカカシに向けて引き絞る

ガウンッ！！、と凄いい音が響くけど、もう目の前にカカシはいなかった

「速すぎだろ……」

周りを見て、カカシが光蛇に向かって攻撃してるのを見つけてた
め息ひとつ

「だけど、この程度ならいくらでも戦えそうなのがするけど……」

こんな攻撃力、もといSTRだと、俺たちにはあんまり効果がない気がする

「真に恐ろしいのは、状態異常です。あんなのをひとりでくらってしまえば、すぐに死にます」

そりゃすごい。……凄いなけど……さ
なんでそんな思わせぶりな発言かしねーのこいつ。教えてくれ
たっていいじゃん

「……ま、いーか」

とりあえず指示通り撃ちまくるか
……よし

ガウンッガウンッガウンッガウンッ……！！！！

「うあああああ！！と」

撃ちまくる、撃ちまくる、とにかく撃ちまくる
……なんか疲れてきた。なるほど、この世界のDEはMPを使っ
て発射するから、疲労がMPである俺は余計に疲れるわけか
……いや、まあ、それは別として

「手首いてー……！」

ガウンッガウンガガウンッガウンッ……！！！！

いや、ホント痛い。やっぱ反動が凄いDEをこんな連射すればこ
ーなるか。いやー、STRの補整が合って良かった。無かったら今
頃は手首粉碎だな

……しっかし、当たらないなあ

ガウンッガガガウンッガウンッガウンッ！！！！

「おい霊介！ あんま無闇に撃つな！ いま俺に当たりそうだったぞ！」

「えー、なんだって？ 聞こえないよー（棒読み）」

ガガウンッガガウンッガガガウンッガウンッ！！！！

さすがに、疲れたな……

いったん銃をおろして一息

「しかし、当たらなさすぎる」

あいつAGI高すぎだろ。まあ、DEXがあんまないせいで、ただ速いっただけだけど

「ウィールズ」

「アイスブレード！」

「フレイムブレイブ！」

もう何度とも知れない攻撃がカカシにHITするが、まったく効果はない

ちなみにまだDE当たってないから

「く……これじゃ、あの時と同じようにやられてしまうー！」

隊長が唇を噛んでそう言っている

まあ……確かに長引きすぎだ。もう、夕方に見えるオレンジ色の

太陽もさつき見えなくなった

「ち……霊介、なんとかDEを当てられないか」

「それがこいつ、このDEだけきちんと避けやがるせいで当たらないんだよ」

ガウンッー！

カカシに向けて引き絞ったが、すでもういない

「なるほど……そいつの危険性を熟知しているということか。なら、当たれば通じる確率も高い」

「ですが、無理は禁物です。時には逃げることも、戦略の一手です」

まあ確かに

「……あの～みなさん」

いままで黙っていたクウが声を出す

「ん、なに、クウ」

「さきほど撃つていなくなってしまったカカシさんは、どこにいったんでしょうか」

………そういや還ってこないな

「……光蛇、どこ」

「見てなかった。エヴィさんは？」

「すみません。少し集中力が低下してしまって、見失ってしまいました」

「ルーちゃんは？ わかる？」

休憩時間からまだ一度も話に参加してなかった人物に、丁度いいから聞いてみる

「……」

一度感情が読みとれないような微妙な表情で、俺を見た

……え、俺なにか悪いことしたっけ

「……知ら「ウアアアア！！」」

ルーちゃんが返事をしているまさにその瞬間、カカシは空から降ってきた

「ルー！！」

隊長が、叫ぶ

だけど、もう手遅れだった

遙か彼方まで空に跳んでいたカカシはルーちゃんの頭上に落ちてきて、踏みつぶす

いくらSTRが少ないと言っても……こんなのを食らったら！

「あ……」

……蘇る。トラウマが、死を目前にした記憶が、ヨミガエル足が潰され、手が潰され、それでもまだ生きていて苦しんでいる父さんの姿

悲鳴すら上げられないまま頭が潰れて死に絶えた母さんの姿
まったく動くことができない、ほぼ体中粉碎骨折をした妹の姿

もうあんな映像は見なくていいと思ってたのに
もうあんな現実には迷わなくていいと思ってたのに

「う…… ああああああああああああ……！」

もつと真剣に戦っていたら。もつと全力で戦っていたら
もうなにも惜しまず、あのスキルでも使っていたら
こんなことになんてならなかったはずなのに
だから、走る。全力であのボスモンスターに迫る
まだルーちゃんが死んだ確証はない
だから……だから……！

まだ間に合うのなら……絶対に助ける

忘れていたのかもしれない。楽観的に考えすぎていたのかもしれない

このゲームの中の死というものを
受け流すべきところではなかったんだ。無視するべきじゃなかったんだ。聞き流すことは間違っていたんだ
それだけは、受け止めないとだめだったんだ

「うあああああああ……！」

無我夢中で、ベースナイフを振り回しながら力カシを的確にDEで狙う

そしてその姿が消え……

「逃がさない!」

ガウンッ!!

自分の死角、真後ろに向けて発砲

「ウウアアアアアア!!??」

そしてあの白い化け物が、初めて悲鳴を上げた

「リョウ……スケ……?」

ルーちゃんが、俺の名前を呼んだ

「初めて、名前、言ってくれたな」

そう言ってルーちゃんの前に立つ

「大丈夫か?」

「……ダメ。もうHPが残り10も無い」

ギリギリ、生きてた、か

「よかった……」

「っ!」

「立てるか?」

「……む、無理。あいつの使う状態異状っていうのは、一週間の回復不可と、10分の麻痺の効果なの」

わりと早口で説明された

「一週間の回復不可、10分の麻痺……か」

確認するように、俺は復唱する

「確かに、強力だ」

もうルーちゃんなんて、一週間は死にかけていなきやいけなくなるのか

「……だけど」

俺は、一度振り返ってから、安心させるように笑ってみせる

「大丈夫だ、俺が、守るから」

「っ！ー！！」

いきなりルーちゃんが激しく赤面する

……あー、確かにちよつとキザ過ぎたかも

でも、ま、いーや。本心だし

「……私のこと、嫌いじゃないの？」

「もちろん。ルーちゃんは、俺のことは嫌いかな？ さっきそう言

ってたし」

「……嫌いじゃ、ない」

「あ、そう……そりゃよかった」

正面に向き直り、俺は二つの武器をしまう

「え……」

ルーちゃんは驚きの声を発してるけど、今は構ってる暇はない
そしてカカシが、赤く光る不気味な目で俺を捉えた

「こいよ、すぐに終わらせてやる」

そしてその姿が、消える

だけど、見える。わかる。あいつがどう動くのか、どこから来るのか

正面左横から繰り出される巨大な拳を、左手で掴んで受け止めた
バカのLvは気分、か。確かにいまなら、なんでもできそうな気がする

だけど、まだだ。まだ、足りない

「レベルオプシオン」

俺はいままで一度も使っていなかったスキルの名を呟く

その瞬間、カカシが移動しようとしたのがわかる

逃がさねーよ、と心で呟いて左手にさらに強く力を込めて押さえ込む

そしてスキル名を言い終わってすぐ、無機質な女の声が頭の中に響いた

『認証しました』

カカシが逃げるのを諦めたように、左腕で殴りかかってくる

だがそれよりも早く、俺はスキルの発動を促す

「Lv100、STR特化、制限時間3秒！」『スキルを発動します』

バウンツツツ！！

空いていた右腕を振るうだけで、迫っていたカカシの左拳を破裂させる

それとまったく同時に、俺の頭の上に新たなゲージが出現した

「ウウア「黙れ」」

左手に少し力を加えただけで、カカシの右拳は砕けた
1秒経った。ゲージが2/3まで減る

「逃がさないからな」

右腕に渾身の力を込めながら、左手で再びカカシを掴む
2秒経った。ゲージが1/3まで減った

「ウウアアアアア！！」

「終わりだ」

そしてその右腕を、カカシに向けて振りかざす

バウンツツツ！！！！

吹っ飛ばなかった。砕けなかった。ただ、カカシ自体が破裂した
風船のように、ほとんどなにも残さず破裂する

そして、3秒が経った。ゲージはもうすでに、0だった

酒場へLet's Go!!

「う……あ……」

や……ばい、な……体が……
MP……使いすぎたか

「靈介……」

光蛇が、俺に近寄ってくる

「ごめ……ん……俺……動け、ないわ」

自然と体が重力に従って倒れる

……ああ、もう見える景色も霞んできた

「後は……頼、む……」

23時まで起こしてくれ、と言おうとしたが、もうすでにそんな体力は残されていなかった

「……んあ？」

目を開けると、茶色い木の天井が広がっていた

「お、起きた！？ 大丈夫！？ 生きてる！？」

なんだかあまり意識が覚醒してなくてよくわかんない
でも、確か、この声は……

「ルー……ちゃん？」

「生きてたっ！」

そりゃ生きてるだろ

ってゆーかその前に……ここどこ

「目、覚めたか、霊介」

「光蛇……」

ああ、なるほど。やっと状況が理解できた

ここは宿だ。あの四人用の大部屋

そして一番近くには、ルーちゃんがいる。額に濡れたタオルがあるし、看病でもしてくれたんだろうか。疲れて倒れたただけだから必要ないのに

「……そうか、守れたのか、俺」

うんうん、よかったよかった。ハッピーエンド

……いや、まで。なにか重要なこと忘れてるぞ

……まあいーか。忘れる〃そんな大事じゃない、だ

「うん、ありがとう、リョウスケ……くん」

背筋がぞつとした

「……くん付けやめて。一時期、母国で男好きの男のストーカーに
言われまくって軽くトラウマ」

「あ、ごめん……リヨウ、スケ？」

ふう、助かった

「つと、そーいやHP大丈夫？」

「大丈夫……じゃない。まだ10以下のまま。あと一週間経たないと……」

ん、その口調から察するにまだ今日のままか

「ふむ」

とりあえず体を起こそうとつとめる

「……む」

……なんというか
死ぬほど体だるい。だるすぎる

「ぐ……」

一度の腹筋すらできないだと……！？

「無理しないで……」

ルーちゃんがそう言ってくれるが、そうもいかない
動けないのはさすがにまずいだろ

「っていうか、なんか……フィンキ？ 変わったね」

感じたまま言つと、なぜか光蛇がアイコンタクトをとつてきた。
解読すると、『この鈍感が。あまりそういうことには触れるな』と、
見えた

ふむ、ウザいなこいつ。とりあえずこつ送つところ

『うつさい黙れ。黙らなきゃマヨネーズ5リットル飲ますぞ』

そしてアイコンタクトを自ら遮断。ルーちゃんに視線を戻す

「そ、そんなことないよ」

なんの話だったけかな……やばい忘れた
……まあいいか

「光蛇、隊長とクウは？」

「エヴィさんは、MSCの支部に今回のことを報告しに行った。ルー
ーさんを連れていかなかったのは、さすがにHP10以下じゃ危な
すぎるからだ。伝言もあるぞ。『ルーをよろしくお願いします、リ
ヨウスケさん』って言つてたな。それからクウは、お前の看病をル
ーさんといっしょにしてたが、さっき疲れた寝ちゃったよ」

光蛇の視線の先のベットを見ると、確かに布団が膨らんでいた

「なるほど」

……く、いくらやつても起きあがれない

「ところで、今何時？」

「23時半くらいだ」

「そっかー、そんな寝てたのかー」

……うん、なんかやつぱり引つかる。なんだっけ……
とりあえずここ最近のキーワードでも復唱するか

「街、酒場、コーヒー、デュエル、MSC、カカシ……クソゲー？」

うーん。どれかひとつに関係あるのかな……

……ん、酒場？ 酒場というと、なんか幽霊とかたくさんいたよ
なあ

幽霊……？

「あ」

あああああああああ！！！！

確か約束したのって、23時じゃん！

「よつと」

冷や汗を流しながら、全力で体を起こす

……なんか楽に起きたぞ。精神的な問題なのか……？

まあ今はどうでもいい

「悪い二人とも、ちょっと出かけてくる」

後ろから聞こえてくるいろんな呼び声を無視して、外にでる

光蛇はめんどろ見が良いからな、今のルーちゃんくらいなら軽く
守ってくれるだろ

「ううおおおおおおー！！」

速く！ もつと速く！ 約束を破ったら殺される！

……いや、母国で一度、幼なじみの約束に遅れたら、半殺しにされたんだよ……あれもまだ軽くトラウマ

遠くに見えていた酒屋が、すぐそこに近づいてくる

「っらぁ！」

扉を開けるのももどかしく、ベースナイフを抜いて、その柄で扉をぶつとばして中に入る

そして大きく口を開いて、叫んだ

「マイナス30分早く来ましたー！！！」

これで騙されてくれるかな……

周りからの痛々しい視線を得意の無視スキルでスルーし、あの黒髪赤目の幽霊を探す

「遅いよぉ」

あいにく、あいつは隅の方の席に一人で浮いていた
とりあえずそちらに向かって歩く

「イヤゴメンチョットマヨネーズパーティーリーダーニゴリツトル
ノマサレテオレテタ」

「棒読みな言い訳はいいから、座りなよ」

お言葉に甘えさせていただくこう

「浮くな、座れ、帰るぞ」

「遅れという凄い態度だね……」

そう言いながらも座ってくれた

「さて、それじゃまずは」

「さっそく依頼を……」

「マスター！ コーヒー1杯」

「……またなの？ 苦手なんでしょー、よく懲りないね？」

ヴァンパイアゴーストの少女、リノがそう言ってくるけど、いつもの如く聞き流す

……まあ返事くらいはしてやるか

「アイアムフリーダム（俺は自由だ）！」

「……？」

あー、そーいや英語通じないんだっとな
あと自分で言っというてなんだけど、意味もわからんし

「お待たせしました」

「どーも」

角砂糖を4つくらい入れて、と

ズズッ……

……ふう

「苦い」

「やっぱりそーいう感想なんだ……」

さて、と

「で、なんだっけ？」

「……ふふ」

ん、どうした、こいつ。頭打ったか？

「毎回、話を聞かないような態度を取るけどさ。君、最後はちゃんと話を聞いてくれるよね」

「ん……あー……そうかな」

「そうだよ」

「……」

「君、友達少なそうだけどさ」

「黙れ帰るぞ」

「たぶん、0じゃないでしょ？　それで、その友達はたぶん、全員良い人だと思うんだ」

「1度目のたぶんはかなり失礼だぞ。ふむ、それじゃ俺は帰るから後はよろしく」

「あ、あ、待って待って！　もう茶化さないからー！」

「……はあ」

「そ、それじゃ本題に入るよ。幽霊の館にやってくる、吸血鬼の退治を頼むよ」

「ゆーれーのやかたって、どこよ」

「うん？　ここ」

こいつは地面を指さす

「ん、地下？」

「違う違う。ここだよ、ここ」

次は中空に手を置いて、ぐるりと回す

「空間を抜けた先とか、裏世界とか、そーいう設定は頭の中だけに
しといてよ」

「だーから、違うつてば。ここだよ、ここ」

次は浮いて、この辺り全体を指し示すように両手を広げた

……ん？ この辺り全体？

「え、ここ？」

「うん、ここ」

「酒場？」

「うん、酒場」

……なるほど。外には幽霊いなかったのに、この酒場だけはい
からな

「つて、マジか」

「うん、マジマジ」

ああ、なんだ。移動する必要なかったのか。いやー、よかったよ
かった

「んで、きゅーけつきつてどこにいんのー？」

「あー、いるじゃん。すぐそこに」

「え、なに、お前？」

「違う違う。君だって、そいつと何度か話してるよ」

誰だよ

「マスター、だよ」

「……は？」

「だ、か、ら、……マ・ス・タ・ー、だよ」

「……へー」

「あれ意外。あんまり驚かないんだ」

「なんというか……言われてみればマスターは目、赤かつたし。ハ重歯あつたし。というか、お前も吸血鬼じゃねーのか？」

「ヴァンパイアゴーストだよ。吸血鬼じゃない」

「っていうかさ、なんでこの世界に英語はない設定のはずなのに、ヴァンパイアゴーストとかアイスバスターみたいな職業名があるんだよ。フレイムバスターに至っては、英語以外も混ざってるし」

「それよりも、早く倒してよ」

「……それってつまり、この酒場を潰せってこと？」

「うん、そうなるね」

「……それって「おやおや、おろしろそんな話をしていますね」」

声が出た方に顔を向けると

「マスター……！」

「私を倒す、この酒場を潰す、ですか。簡単に言ってくれますね」

「あんたみたいな下級の吸血鬼が吸血鬼を名乗るなんて、吸血鬼の名が汚れるだけだよ」

「黙れよ、負け犬の吸血鬼。幽霊に成り下がった哀れな者よ」

あれ、マスターこんなキャラだっけ

もつとこう……無口なハードボイルドキャラじゃなかったのか？

「あはは、そうかもねー。でも、あんたほど落ちぶれてはいない」

「ほざけ。……そうですね……あなたたちのような危険分子は、早めに削除しておきましょうか」

え、なに、もうバトルする感じですか？

「君、早くそこから離れて！」

「え」

ドゴォー！！

つとあぶねえ！

「なにすんだよマスター！」

マスターは、右腕で、元いた俺のイスを砕いていた
周りの客どもは、幽霊以外逃げていく

「やっぱり、幽霊たちとグルだったんだ」

「悪いかい？ まあ、君みたいな吸血鬼の幽霊は厄介だからね。物理攻撃は通じないし、ただの幽霊ではないから相手をしにくい。だが、これだけの幽霊が仲間なら、簡単に殺すことができる」

「な……殺、す？」

「うん、そうだよ。殺すんだ。その吸血鬼の幽霊も、君もね」

……おいおい、ふざけんなよ

……だったら、俺も……

「……レベルアップ……」

と、言いかけてから俺は考える
今、これを使っていいのだろうか
相手はLv不明の吸血鬼。それに、無数の幽霊

いま……夕方に一度倒れたこんな状態で、レベルオプションを使えば……確実に倒れる

「……ダメ、か」

しかたがない。現状でなんとかしないと……

そう思い、ベースナイフとDEを両手に構える

……さて、と

「なんだか知らねえが、やるっきゃねえな！」

「私は幽霊たちを相手する。あの吸血鬼の野郎が邪魔をしなければ、全員始末できる」

「殺す……のか？」

「もう、死んでるよ？」

「……で、俺はあの吸血鬼を倒せてか？」

「うん、そう」

随分と買い被られたもので

「すぐ終わらせてあげますよ」

「やっぱり……戦わないとだめなのか」

まだ疲れは取れきっていない……というか、レベルオプションのせいで疲れまくってる。MP使いすぎだろ、あれ
対等に戦えるとは思えない。と、なると頼りは……

「やっぱ、DEか……」

これ、拾つといてよかったな。かなり役に立つ
……さあて、始めますか

「
イツ
ツシ
ヨウ
ウタ
イム
」

ヘッドショット

「うぁっと!」

危な……威力ありすぎだろ、この蹴り
一発で床に穴開けたぞ、凄い勢いで

「吸血鬼のSTRは、普通の人間の何倍にも相当する。君に、勝ち目はない」

「DEの攻撃力は、普通の武器の何倍にも相当する。あんたに、勝ち目はない」

ムカついたから真似してみる

「減らず口だけは一級品ですか」

「敬語だけは一級品ですか」

「……いい加減、うるさいですよ」

マスターが、右手を俺へ突き示す

「ヴィズナ」

そしてその手の平から、紫色の球体が発生、発射された

「うぉっ!?!」

疲労気味のせいでかわせず、ギリギリのところで球体をベースナイフで切り裂く

……これ、ゴブリンが放った火の玉に近いもんな? あれと

同じように斬れたし

「やりますね。でも、これならどうですか？ ザ・ヴィズナ！」

マスターの右手から、今度は人の体くらい大きな紫色の球体が放たれる

「うおっ！ と」

一か八か、DEで向かえ撃つ

ガウンッ！！

気持ちのいい銃声が響いたかと思うと、その球体は爆発し、俺は爆風に2mほど吹き飛ばされる

「いて……」

まあ、やっぱすげーな、DEは

「……凄いですね。少し甘くみすぎていました」

「そりゃどーも。評価はそのままであーけーです。むしろ変えんな」

「いえ、そう謙遜なさらず。あなたを、本気で相手すべき者だと認めましょう」

認めてくれない方がうれしいです

「その攻撃力は、我らが『リビングデッド』の驚異になりそうです。早めに処分しなければ」

「……リビングデッド？」

あれ……なんだっけ。確かそんな単語を最近聞いた気がする……
うーん……まあ、今はどーでもいいーか

「欲しいならお前らも拾え。運が良きゃ落ちてるから」

「さあ、久しぶりの本気です」

あ、こいつ無視しやがった。それは俺の特権だ！

「見せてあげましょう、吸血鬼の力を」

そう言うと、マスターは腰からナイフを取り出し、自分へと突き刺した

「な……？」

そして、言葉を放つ

「オーバー」

「吸血鬼最強の自己エンチャント。それが、これです」

そう言うマスターの体に、赤い……血のように赤いオーラが纏われ始める

「これは私の全能力を1.5倍にし、全ての攻撃に毒の追加攻撃を与える。ただ、発動条件に『3日間吸血をしない』『HPが半分以下になる』というものがあります……」

よくいるよね、こうやって自分からいろいろ説明してくれる敵って

「それに、これを使うと……私自身、強烈な吸血衝動にかられてしまふのです。いやはや、困ったものです」

へえ

「吸血、受けないように頑張ってくださいね？ 当ててしまうと、このエンチャントが解けてしまいますので。まあ、吸血は通常攻撃の何倍も威力がありますし、毒と麻痺の状態異常……それに、15秒間私の全能力値を2倍、吸収した分のHPを回復というものがありますし、さしたるものではありませんが」

「ご親切にどうも」

つまり要約すると、ここからは本気の本気でやらなきゃ死ぬと
……なるほど

「なら、望むのは短期決戦だ」

あいつのHPは今、半分以下だ。今なら……

「っ……………！」

ベースナイフを防御に構え、相手の拳を受け止める

そこにDEを突き出し、引き金を引こうとするが、もういない

「後ろですよ」

「っ！」

背中を、蹴りとばされる

いくつものイスや机に体をぶつけながら、最後に壁に当たり、めりこむ

「っ……く……かはっ」

うあ、やばい……人生で初めて血、吐いた

「く、そ……」

速さで言えば力カシの方が圧倒的に上だ。そして、それを俺は捉えられる

だけど、今はこいつの動きさえも見えない

腹筋一回すらまともにできなかったこの体じゃ、捉えきれない

「拍子抜けですね……もう少し強いと思っていましたが……」

だが……だけど、殺す方法なら……こいつを殺せる方法なら、ないわけでもない

DEのある特殊効果が、それを、一発射殺を可能にする
あくまで、殺す場合は、だ

「……やらないきゃ、だめなのか……？」

殺されるからって、相手を殺して……いいのだろうか
いい、わけがない

だけど、こいつを殺さずに倒す方法なんて……まったく、ない
なら、殺すしか……

だけど、殺すのは……

……………そもそも俺は、どうしてこんな選択を迫られてるんだ？
ただの依頼という理由で、殺さなきゃいけないのか、こいつを
それなら、その依頼は破棄すればいい
破棄して、何もなかったように逃げればいい
そうすれば、誰も殺さず、俺も殺されず……それで、いいんじゃないか？

「……………いや」

違う。これは、俺は、依頼のためにここに立ってるわけじゃない
仲間だ。仲間がいるから、守らなきゃいけないやつがいるから、
立ってるんじゃないのか？

俺が逃げれば、あの吸血鬼の幽霊が殺される
なにもしなければ、二人とも殺される

「…………やるしかない、のか？」

迷え、迷え。迷え迷え迷え迷え！

これは人の死を選ぶ決断だ。迷いたきゃ迷え、迷いたいだけ迷え！
そうして何度も迷って行き着いた答えが、変わらないのなら……

「やるしか、ない」

「こいよ、凡庸な吸血鬼くん」

勝負は、一度。それを逃せば勝ち目はない

「強がっても、無駄ですよ？」

気づけば、目の前に拳があった

「つと！」

ギリギリしゃがんで避けた後、ベースナイフでこいつを斬りつける

「無駄ですよ」

しかしそれは、こいつがもう片方の手でベースナイフの刃を直接
掴まれて止められる

さらに

「ふんっ！」

「っ！」

ベースナイフを盗られ、マスターはそれを大きく後ろに投げた

「ち……」

後ろに、1歩、2歩、3歩……と、下がってしまう
すると、すぐに背中が壁に当たってしまった

「行き止まり、逃げ場はないですよ？」

「そう……だな」

だけど、それでいい。そうじゃなきゃ、だめだ

「そろそろ吸血でもして、終わらせて上げましょうか？」

「すきにしろ。どーせ男の血なんてうまくなーぞ」

「生き血は、なによりもうまいですよ」

「……血液つて、とりすぎると病気になるらしいぞ」

「吸血鬼には関係ありません」

「……俺の血は毒だぞ」

「まあ確かに、さっき蹴ったときに毒の状態異状にかかりましたからね」

おっと、そりゃ気づかなかった。さっきから気持ちが悪いのはそのせいか

「……はは」

「終わりです」

そうマスターが言い放った瞬間、その姿が消えた
と思えば、すでにそいつは目の前にいた
とっさに、DEをある位置で構えておく

「吸血」

ガブッ！

首に噛みつかれた瞬間、全身に激しい痛みと、痺れが走った

「く……あ……」

「あはははは……これでHPはMAX。それにあなたは、麻痺状態……もう勝敗は、見えていますね」

……はは

「あ……あ、そう、だな……この……勝、負……」

ある位置で構えてあるDEは、そのまま動かさない

「無駄ですよ。いくら超威力と言えど、たった一発くらい」

「はは……おめ、でたい……やろっだな……」

「……？」

「俺の、勝ち……だ。食らっつけ……」

指を少し動かすくらいなら……引き金を引くくらいなら、麻痺しててもできるはずだ

「ヘッド、ショット」

ガウンツツ！！

もの凄い音が耳元で響きわたり、耳を塞ぎたくなる
だがそれをがまんして——いや、麻痺しててできないただけだ
——負け犬のセリフでも聞いてやることにする

「なん……だと……」

「お前、の……負け、だ」

「なんだ……なんだこれは！？　一撃で……私のHPが……0に！
？」

……DEの特殊効果、それは、『ヘッドショット』

相手の頭にその銃弾をぶちこむと、相手が必ず死亡する

まあ、即死魔法系扱いだから、耐性があるザコモンスターとかボスモンには通じないけど

「ぐ……おおおおあああああああああああ……!!」

ああ……ヤバイ

本日二回目の気絶が始まりそうだ

「まあ……いーか」

そう思った俺は、そのまま目を閉じて倒れこんだ

「あーらら……やられちゃったよ、あいつ……できそけこないの吸血鬼、やっぱりに役に立たなかったか」

「おまえ……は……?」

「あははははは、まだわかんないんだあ。僕だよ、リノ・ヴィレナドルマ……二つ名は【死を招く者】インヴィテッド・デス」

「な……じゃあ……あなたは……」

「うん、そうだよ。リビングデッドの幹部。君の上司」

「……安心、しました」

「……ん? あれー、動けなくなっちゃった。まあ、いいや……あはは、まさか、一対一……しかも一撃で倒しちゃうなんて、面白いやつもいたもんだ。しばらくは……これから楽しめそうだなあ」

彼を見て、僕は笑った。これから起こる、楽しいことたちを想像

して、笑っていた

「新しい遊びの、始まりだ」

「……んあ？」

目を開けると、茶色い木の天井が広がっていた

「……生きてる？」

「生きてるよ」

寝ていたベッドの隣には、イスに腰掛けているルーちゃんがいた

「……あれ？ あいつは……？」

あの、ヴァンパイアゴースト、リノはどこに行ったんだ……？

「あいつ？」

「目、覚めたか、霊介」

「なんかいま聞きたくない音が聞こえた」

「せめて聞きたくない声にしてくれ。悲しいだろ」

「知るかうるさい黙れ」

と、起きあがるか……

「……」

やっぱり腹筋一回もできなかった

「無理しないで」

っていつかさつきから多少のデジャヴを感じるんだが……

「クウは？」

「ここにいますよ」

……なんか凄い近くから聞こえた気がする
おそろおそろ壁側の方に顔を向けてみると

「ぬぁっ!？」

……目の前にいた。つか、同じベッドで寝てやがった
これなんてエロゲ？

………じゃなくて

「なんでクウが隣にいるんだよ……」

「逃がさないようにするためです」

「どうやって寝ながら逃げるんだよ」

「大丈夫です。心配しないでください」

なにがだよ……

「……クウ、ひとついいか？」

「なんですか？」

「女の子が軽々しく男の隣で寝んな。夜這いでもする気か!？」

「え、でも私……よくお母さんの隣で寝ていましたよ？」

「クウは常識が抜けすぎだ……もうちょっとしっかりしてくれ」

「おい、霊介」

「うつさい黙れ」

と言つてやったのに光蛇は無理矢理肩を組んで小声で言つてきた

「いいじゃないか、別に。お前エロゲの中に入りたいと言つてた
だろ。こういうシチュエーションもいいんじゃないのか？」

はあ？ なにこいつ？

「お前なんだ？ ロリコンか。確かにまあ良かったけど、子供
に夜這いされるシチュエーションより、その前に美女キヤラ出して
くれ」

「……………そうか。そういう奴だったな、お前は」

そう言つと光蛇は組んでいた肩を離した

「むう……………そこまで言つならしかたがないですね」

クウもそう言つと、起きあがつて地に足をつく
つてゆーかクウっていつも裸足だけど、いいのかな、あれ。服装
も茶色いボロマント一枚だし

「ところでいま何時？」

「11時だな」

「え、朝？」

「ああ」

そうか……………一日経つたのか
やけに長い一日だったな、昨日は

「ああ、ちなみに2日前が、お前の最後の記憶な」

……え？

「え、つまり、どゆこと？」

「お前は昨日一日たっぷり寝てたってことだ」

……マジか

「ルーさんが安全になるまでまだあと5日ある。その5日は、お前もじっくり休め、霊介」

……なんだかんだ言っといてなんだけど、やっぱり光蛇がリーダーでよかったな

「……どーも」

まあ、そんな女子に告白より恥ずかしいことは口が割けても言わないけどな

「自己紹介、しとくか？ ルーちゃんも新しくいつしよに行くんだし」

「……ああ、そうだな」

俺は、クウを見た

モンスターウィザードとしての、クウを

「はい、そうしましょう」

クウは、なんの迷いもなくそう告げていた

眩しいくらいに、笑顔で

……やっぱり、こいつら全員、良い奴らだよな

あのヴァンパイアゴーストの言ってたことも、当たってた……か
もな

次回予告、第三章（前書き）

はいでした。ほぼ名ばかりの次回予告第二弾。
次回予告は毎度短いです。

第三章から本編みたいなものなので、これからもよろしく願います。

次回予告、第三章

「『リビングデッド』の奴らの動きはどうだ？」

俺は、隣に立ちすくしているそいつに話しかけた

「いまのところ、あまり大きな動きは見られないよー。どーやら、戦力を集めてるみたいだねー、おにいちゃん」

「はは……そろそろその呼び方、改めてくれないかな」

「実の兄弟だからいいじゃない！」

「まあ、そうなんだけど、さ……」

と、そんなとき

俺たちのところへ、ある情報が入ってきたんだ

「団長。西の方角からの情報です」

「そうか、霊介が……」

「うわー、なんか久しぶりだねー」

「強く、なってるかな。手合わせしたいなあ」

「もう、おにいちゃんは霊介と遊ぶのが好きだよねー」

「はは。そりゃあ、あいつは弟子みたいなもんだから。……この世界に来て、強くなってくれてればいいけど」

「霊介かあー。早く会いたいなあ……」

「お前はあいつのこと、好きだからなあ」

「む、なんか誤解のある言い方！」

「はは……」

「むふふふ……ねえお兄ちゃん！　いつ霊介たちは来るの？」

「そんなに詳しくはわからないよ。ただ、しばらくは近くの街に滞在するみたいだから、10日と数日くらいだろうな」

「おお、待ち遠しい！」

「俺たちは無闇にこの本部から動くわけにはいかないからな。……

ま、あいつの幼なじみにでも迎えに行かせてやるさ」

「おー、巳依ちゃんかな？」

「うん」

「無難だねえ」

「はは……」

「それじゃ、私は部下たちと遊ぶ仕事があるのでこれで」

そう言つと、彼女は、妹は一瞬でこの場から『消えた』

「遊ぶのが仕事って……」

久しぶり、だな。　霊介

「んじゃ、ま、『アーミー』のリーダーとして、あいつの師匠として、再会を楽しみますか」

N
e
x
t

G
a
m
e
.
.
.

大陸中央を目指そう

暇過ぎた

この5日間、本当に暇すぎた
思わず『自分で考えてるバーカ』でいくつもスキルを作ってしまった
うほど、暇だった

「ついに……5日経ったか……」

体の調子は、3、4日前から好調になりかけてたから、ほとんどの日にちはルーちゃんの状態異状の回復に使った

どうやら治せない状態異状だったらしく、こんなに日にちを使ってしまった

だけど、それも今日で終わりだ

俺がルーちゃんの警護に当たり、光蛇はクウのLv上げのために
励む。そんな5日は終わったのだ！（ちなみにクウはこの5日間で
Lv13まで上がった）

「やっとHPが回復できた……」

「よかったなー」

「うん。護衛ありがとう、リョウスケ」

「あいよ。まあなにもなかったけどね」

ちなみにルーちゃんには、クウのことや俺の職業についてはもう
説明した

クウのことは、真剣に反応してくれたけど……もちろん俺の職業
についてはかなり笑われた

「ついに、旅の再会ですか」
「楽しみだな」

まあとにかく、新たな仲間も増えて俺たちのパーティはさらに賑やかになったんだ

「そういえば、これ」

返すのを忘れていたベースナイフを、ルーちゃんに渡す

「あ……うっん、いいよ。それは、リヨウスケにあげる」

「うーん……それは助かるんだけど、さ」

「……？」

「ルーちゃんって、スキル封じられたらなにもできなそうだからない。たとえば沈黙状態とか」

「うっ……」

「だからさ、危なっかしいんだよ、このサブ武器？ 持ってないと」

「……うん、わかった。ありがたく返してもらっよ」

「俺にはDEがあるし、DEを支える自作ガンスキルも作ったし、しばらくは問題ない」

他にもいろいろ作ったけど、今は秘密だ

ちなみにこの自作ガンスキルは、前回の力カシ戦や吸血鬼戦をモデルにして作ってある

あの時の問題点を把握し、補うガンスキルを作った

それから、まあちょうどいいから説明しとくか

レベルオプションについて、だ

レベルオプションっていうのはもちろん俺が作ったスキルで、し

Vを指定、ステータスの能力値を操作、そしてその状態にいる制限時間を決めて発動する

LVが高ければ高いほどMPは使っし、制限時間を長くすればするほどMPを使う

3秒と言えど、LV100だ。あそこで倒れたのはしかたない、うん

「おい、二人共、行くぞ」

「あいよ」

「わかった」

さあ、旅の再会、俺たちは東に向かって歩き出す

今回は光蛇も進路を考え、ほどよくモンスターが出現するルートを選んでくれた

旅は道連れ世は情け、つと

そーゆーわけで、次に俺たちが目指すのはこの大陸の中央に位置する城下街。……城の名前とかは知らないけどね

「基本的には、クウが主戦として戦うのが妥当だろう。戦闘にたくさん貢献するほど、経験値が入るからな」

「まー確かに、クウはまだ一番弱いしなあ」

「この5日間であれだけLVを上げられたのも凄いよ。まあ、序盤のLVUPは比較的楽しいが……」

俺と光蛇は、旅1日目の夜の就寝時間後、あの二人が寝たあとに今後について話し合っていた

明日からは、本格的にモンスターが出てくる区域に入るから、作戦会議だ

ちなみに、光蛇はVSカカシのときも率先して囃役にあたったり、クウといっしょにモンスター退治もしていたから、Lvが39に……1だけ、上がっていた

俺にLvは関係ないし、ルーちゃんはまだあまりともに戦えてなかったから、Lvがここ最近で上がったのは光蛇とクウだけだ

「とりあえず、こういう配置はどうだろう。まず、一番パーティでLvが高い俺と、経験値を必要としないお前が周囲の警戒に当たり、クウを主戦力としてルーさんをサポートにまわさせる」

「ほう」

「俺たちはクウが戦っているモンスター以外のモンスターを警戒し、そいつらが襲ってきた場合は、倒さずに弱らせるだけしておく。主に戦わせたいのはクウだから、クウが現在戦っている相手が終われば、次はそいつらの相手をしてもらう。それまでは時間稼ぎだ」

「ふむ」

「クウはさっき言ったとおり、じゃんじゃん戦闘に貢献してもらおう。MP切れや、集中力の低下……HPの急減などは危険に値するから、そのへんはルーさんに全てサポートしてもらおう。とまあ、具体的な内容はこのくらいだな。どうだ、霊介？」

「いいんじゃないかな。あいつも、よくやってくれてるしね」

自分で言っというてなんだけど……あいつって、どいつだ。クウ？
ルーちゃん？

「よし、じゃあ基本戦闘についてはそれを採用しよう。次に、モンスターが出る区域での休憩や野宿などについてだが……」

まだ続くのか……いい加減寝させてくれ

「休憩は、見通しが良いところであればモンスターが近くにくれば

すぐわかるから、別にいいだろ。夜に狙われる心配は……俺とお前で交代の見張り、でどうだ？」

「わかった、採用しよう。最後に、この先の地形と出現モンスターについてだ」

まだ会議すんのかよ……

あーもー、めんどくさいなー

「それについては明日に二人も起きてるときに話せばいいだろ。寝たら俺、そんなの忘れそうだし」

っていうかよくこんなゲームの中に寝袋があったものだ。相変わらず世界観がずれててクソゲーだな

「単純だな……だけど、確かにこれは、会議するというより、教える方に近いから、全員の前で言った方が効果的か」

「そーゆーこと。んじゃ寝るから。お前がなに言ってももう寝るから。じゃーなー、おやすみ」

そーして俺は、特技「目を瞑った瞬間に寝れる」を使って深い暗闇の渦へと落ちていった

あれから、さらに2日経った

特になんの苦労もなく順調に旅は進み、現在も単なる雑魚モンスター共……通称『ザコモン』の相手をしているところだ

「1、2……3匹か」

現れたのは、三匹のモンスター共。名称は「プチデビル」、そして「イノセントドッグ」

プチデビルくらいは言わなくてもわかるだろ、ちっちゃい悪魔だ。そいつ二匹な

イノセントドッグとかいう奴は、簡単に言えば緑色の狼。気色悪すぎる

ちなみにこの二種類はもう、一回以上は倒してるからHPが確認できた

「クウちゃん。さっきと同じように頑張って」

ルーちゃんがクウを励ましている

ただいま、クウとイノセントドッグが戦闘中。プチデビル共は俺と光蛇が抑えていた

「フレイム！」

クウが叫んだ

その右の手の平には、火の球が形成された
しかし、それは放たれず、手に残ったままだ

「さすがだな、クウ」

光蛇が誉めている

なんか……魔法を放たずに制御するのは、普通じゃ無理らしい
だけど、クウは他でもないイレギュラー、モンスターウィザード
そのため、物理的魔法攻撃や、魔法構造変更だかなんだかが使え
たりするらしい

あー、もう、だめだ。頭痛くなってきた。もういや。解説終わ

り。後は直感で理解しろ読者共^{バカ}

クウは馬鹿みたいに正面から飛びかかってきたイノ（略）の体に直接フレイムをたたきつけ、魔法構築なんたらを変換して手動爆発させた

「グルウウ……」

そしてイノ（略）のHPが急激に減り始め、一撃で0になった
どうやらクリティカルヒットだったらしい

「クウ、次はこっちだ！」

光蛇が叫んで一匹のプチデビルをクウの方へ誘導させた

「 + # % & a m p ; ^ : x ! 」

と、いきなりそのプチデビルが奇妙な声あげた
なんだ？ 腹でも減ったか？

「サンダー！」

と思っていたらそのプチデ（略）の頭から雷が放たれてクウへと飛んでゆく

クウは自らの雷を盾のように変形させ、それを防ぐ

その後、槍のように変形して、放突ーというより投げたーした
それはプチデに突き刺さり、絶叫をあげた

クウはそれに近づき、止めとばかりに先ほどの手動フレイムを食らわせて昇天させた

「あいよ、最後」

そして最後は、俺が抑えていたプチデ

と、今度はこいつがなにかをする前にクウが動き出す

「サンダー！」

今度は普通に雷を放出し、プチデに直撃

その隙をついてさらに撃って撃って撃ちまくり、あっさりHPが0になり、戦闘終了

「慣れてきたな」

光蛇の呟きを華麗にスルー

戦闘後の一番めんどくさい、G拾いとアイテム拾いと死体漁りの
仕事に没頭

イノの肉はまずそうだから無視。プチデはそもそも食べれるか知らんから無視。アイテムは落ちてない、無視。Gはプチデの紫の体液とかで汚れてて拾う気になれない、無視

消去法でいくと、俺の役割は見学だな

見て、学ぶ。良い言葉だ。見ないで、学ばない。最高に良い言葉だ

「まだ、クウちゃんは多人数との戦いはしないほうがいいね。無駄に魔法をたくさん使いすぎちゃうから、MPがすぐなくなっちゃう。最小限に……」

ルーちゃんはクウにさっきの戦闘のアドバイスをしていた

……ふむ、実に、暇だ

災難でも良いから、なにか来ないものかね

「たとえば……見たこともないモンスターが現れる、とか」

まあ、そりゃないか。この辺はそーゆーのでてこないって光蛇は言
って……

「……」

言って……たよな

っーかなにあれ、なにあの馬っぱい生き物
モンスター、か？

「おい光蛇、あれ……」

「なんだ？ ……………ユニコーン!？」

ってやっぱそうなのか。ってゆーかマジで見たこともないモンス
ター来たし

……あれか。フラグってやつか……

ドSな幼なじみ

「クウ！ いったん下がれ！」

光蛇が言いながらはがねの剣を抜く

「んじゃ俺も」

俺はDEを取り出す

「リヨウスケ」

と、ルーちゃんがベースナイフを柄から抜いて投げてきた
危ねえよ！

危つく取り損ねて怪我するところだった。まあクウの『ミス（HPを全体の1/4回復する）』で治せるけど、さ

「アタック、アタッカー、プロテクト」

そしてルーちゃんは青白い魔力の剣と不可視の剣、そして青白い
オーラのような防御壁を作り出した

「サンダー」

クウは危ないから、後ろから援護してくれるみたいだ。雷が右腕
に渦巻いていた

「で、どうするよ、光蛇」

倒すか、逃げるか、まあ話しに通じるなら説得、とか

「元の世界では伝説上の生き物だ。この世界でも、相当やばいやつかもしれない。とりあえず無理には戦わず、話が決裂したなら相手の強さを見定めてから、全て判断する。そのまま倒すか、逃げるか」

大抵、こーゆー伝説上の生き物は知性があるからなあ。案外、話通じるかもな

そして光蛇は、話しかけ始めた

「ユニコ「ブルウウウ!!」」

交渉決裂みたいだ。頭悪いみたいだな、この羽生えたキモイ馬

「光蛇!」

「わかってる」

光蛇は剣を構え直し、猛然とユニコーンへと斬りかかる

「ん、ああ、なるほど」

これ、避けられるな

わざと避けられるようにしてるみたいだ

つまり……

「避けた瞬間を、狙えってか」

そーゆーことならっ!

俺も光蛇に次いで走り出す

「クウ！ 俺が今向かっている方向にサンダーを放て！」

「え？」

「いいから！」

「は、はい！」

と、その瞬間光蛇がユニコーンの左半身へ向けて大きく振り下ろすそれはあっさり、予定通り、俺の目の前へと避けてくる
まあ、半身狙われたなら反対行くしかないからな

「くらえ！」

俺はわざと大きく声を出しながら、斬りかかるように見せかけてしゃがんだ

その直後、クウが放ったサンダーが俺の頭上を掠めてユニコーンへ飛んだ

案の定、それは避けられた

が、その直前に俺は避けた方向にDEの銃口を向けていた

これは絶対に、避けられない

ユニコーンもそう判断したらしく、その一瞬で俺へ魔法を放とうとする動作をした
が、

「4人が相手じゃ、分が悪かったね」

その声が頭上から聞こえた瞬間、青白い魔力そのものがユニコーンへ放たれ、直撃

確か、ウィールズとか言う魔力自体を放つ攻撃だった気がする
ひるんだ隙にDEを脳天にぶちこんでやる！

ガウンッ！！！！

一撃必殺。ユニコーンの目からは生気が失せていき、HPが0になっただけなのでそのままここに倒れ伏した
そして消滅した

「…………え？」

あれ、このゲーム、モンスターの死体、残らなかったっけ

「…………それにしても、あっさり終わったな…………霊介」

「まあ、そーだな」

「まさか、誰かがいまのユニコーンを仕向けたなんてことは、ないよなあ？」

光蛇はわざとらしく声量を上げて、そう言った
うるさいな

と、そんなとき

「黙れ、クズ。そんなに叫ばなくても聞こえる」

と、どこからか声が聞こえた

…………気のせいだろうか。聞いたことがあったような…………
うん。気のせいだ。そうしよう。そーゆーことにしよう

「「誰だ」」

うわ、光蛇とハモった

「いや、霊介は私のことしってるだろー」

……うん、やっぱりどっかで聞いたことのある女の声だ

「『あちらがわの世界』出身の、篠崎巳依だ。よろしくなくていいからな」

そう言ってそいつはさっき倒したはずのユニコーンに乗って落ちてきた

篠崎……巳依？

えーっと……確か……

……あれ？ 忘れた。まあいいか

長い黒髪と黒眼は……なんか元の世界の人間の特徴と一致していた背は150cmくらいに見える。顔は童顔だ

問題は服だな。白い半袖の服に黒いロングコート、黒いスカート。

あとなんか模様が刻んである黒いリストバンド、黒い靴

つまり、なにがしたいのかと言うと

「また服装パクリか……」

まあ、白が混じってるだけマシか

「誰がパクリだ、バカか」

「うーん、でもなあ……二度あることは三度あるからなあ」

「おい、殴るぞ」

「すいませんでしたー！」

……ん？ あれ？ 俺のこの完全無視モードの攻略法その1、殺気を込めて脅す、を知ってるのは確かあいつだけのはず……

って、ああ、こいつ

「なんだ、巳依か」

「そんなに驚かないのか」

「いや、だって、巳依だし。幼なじみだし。見慣れてるし」

「おい霊介、ちょっと来い」

「ん？」

光蛇が呼ぶので、しかたなく付いていくと、耳を貸せというジエスチャーをしてきた

「誰だ」

話、聞いてろよ。俺じゃないんだから

「篠崎巳依」

「それは知ってる」

「幼なじみ。まあ高校違うから、光蛇は知らないだろうな。中学じや、俺たちと教室のある階自体が違ったし」

「どうしてそいつがここにいる？ この世界に」

「知らん」

「なら、あいつは安全なのか？」

「性格はDSだけどツンデレで、あと隠し事は超苦手だから、危険な可能性はないな、たぶん」

「そうか、お前が言うなら、危なくはないな」

光蛇はそう言い残して巳依に向き直った

ちなみに名前は、『ミイ』と表示されてる

「俺は香川光蛇。こっちの二人は、クウ・バルハルト。ルー・シウ

ラシベル」

「知ってる」

「どうして知っている？」

「とある筋からの情報だ。それくらい予測しろ、クズ」

俺の完全無視モードに匹敵する、酷い物言いだな、相変わらずだが光蛇は平然としていた

「なんの用で、俺たちに攻撃を仕掛けた」

「暇潰しだ」

「目的は、なんだ？」

「黙れクズ。それを話してやろうとしてるんだから、少し静かにしろ！」

「……本当に大丈夫なのか、霊介」

「へーきへーき、いつものことだよ」

たぶん平気

「さて、お前たちのところへ会いに来たのは他でもない。うちのギルドのリーダーが、お前らを連れてこいと命令したからだ。わかったか？ わかったなら右手を上げる。わからなかったら左手を切断しろ」

全員、俺以外手を上げた

「なにがわからなかったんだー、霊介」

「ん」

「いや、その前に左手を切断してやるべきだったか。待ってる、すぐナイフを用意してやる」

「ん？ ナイフなら持ってるぞ」

「なら貸せ」

「ほいよ」

投げて渡してやった

「つて、おい！ 靈介！」

ウルサイ奴だな、光蛇

「……………」

「……？」

「……………なにがわからなかったんだ……………」

まあ結局、こいつのあーゆーところは、ほとんど冗談なんだよな
そして巴依がベースナイフを投げて返してくる
いや訂正。全力で。凄い勢いで。俺に向かって投げ刺そうとした

「ん」

まあこの世界じゃDEXやAGIの補正があるからなんとか取れた

「全部わかんなかった」

「死にたいのかー？」

「1から説明を求む」

「……………しかたない。バカにもわかるよう、しっかり箇条書きで、棒読みで、教えてやる。質問した奴は殺す」

さっきから巴依のペースに飲み込まれてばかりの二人、クウとル
ーちゃんの方を確認した後、振り返ると説明が始まった

「1、私たちはこの世界に飲み込まれた。

2、そのうちの一人の現リーダーがギルドを作った。

3、私はそこに入った。

- 4、しばらく経った後にギルドは西地方でお前らを見つけた。
- 5、リーダーはそれを私にギルドに迎えるように指示した。
- 6、私はここに来た」

しつかり箇条書きで棒読みで教えてくれた

「わかったか？ わからないやつはどうしようもないバカだ、ここで朽ち果てる」

「俺たち以外にも、この世界に来た人たちがいたんだな」

光蛇はもうこいつの口調に慣れてきたみたいだ

「そんなことも知らないのかー、バカが。当然だ、探せばいくらでもある」

「篠崎さんたちは「この世界では已依と呼べ。表示されてるだろうズ」」

「已依さんたちは、この世界について知っているのか？」

「多少な」

「それを教え「そのためにギルドへ迎えるように私は指示されたんだ。全部ギルドに来ればわかる」」

……話長すぎ。眠くなってきた

「ギルドはお前らが目指している中央の都、エノリークにある。丁度いいだろう？」

「なら、最後にひとつ教えてくれ」

「もうたくさん質問してるんだから、許可取る必要ないだろ……」

「そのギルドの名前は、なんだ」

「『アーミー』だ」

その後、俺は立ったまま寝るといふ秘技を発動してしまい、巳依に半殺しにされた

そして現在、歩きながら詳しく自己紹介中。ちなみに俺たちの自己紹介はしなくてもいいみたいだった。クウのこともバレてたし

「改めて……私は篠崎巳依。そのバカと同じ年で、Lv27のモンスターコントローラーだ」

「モンスターコントローラーというのは、どういうものなんですか？」

あーあと、クウとルーちゃんも打ち解けるための努力中

「そうだな……モンスター共を支配する職業だケットシー」

「私はケットシーではありません」

「さっきのユニコーンも、その力？」

「そうだ。お前らも、専用スキルがあるだろー。それと同じだ」

「だが、まさか『アーミー』とこんなに早くコンタクトを取れるなんて、願ったり叶ったりだな」

「そーっすね」

確か……三大ギルド？　だっけ。どーでもいいけど

「そーいや巳依って、いつ頃からこの世界にいの？」

「私が『あちらがわの世界』から来たのは、まあかれこれ20日以上前だなー」

一週間〃1日だから、元の世界で3日くらい前からか。そーいや

そのくらいから姿が見えなかったもんな

「この世界に来て、すぐアーミーに入団したな。あそこは『あちらがわの世界』から来た奴が多いというのが理由だ」

「詳しくは、ギルドに着いてから？」

「そうだ。よくわかってるじゃないかクズのくせに」

「眠い……」

「殺すぞ」

「すみません……」

……まあそんなこんなで、俺たちは一時的に巳依を仲間にしたのであった

救出作戦……？

巳依と初めて会ったのは、いつだったか……物心つく頃には知り合いになってた

巳依の両親は、確か子供（＝巳依）が原因で、離婚。母親は一人で巳依を養うために、働き尽くしの毎日だったらしい

そのため、巳依はよく俺の家に預けられることが多かった。はっきり言って友達以上兄弟未満みたいな微妙だけど親しみのある仲だった（はつきりしてないな）

んで、俺は幼い頃から完全無視モードを会得しており、周りのことを無視し続けていた。巳依は俺に話しを通じさせるのにムキになって、毒舌モードを幼い頃に会得した

保育園、小学校でも俺は完全無視モードを常に発動していて、友達は少なかった。けど、巳依がよく話しかけてくれて（毒舌だったけど）、嬉しかった

それから何年も経って、俺は去年、両親を失った

そしてショックで学校に行かなかった時は、俺を巳依は励ましてくれた。光蛇も励ましてくれた

何が言いたいのかというと、巳依はこー見えて良い奴なんだよ

「そろそろ着きそうだぞ」

あれから何日か後、道が石の道になり、モンスターがいなくなり始めたところで地平線の向こう側に大きな街が見えてきた

「あれが、エノリークか」

「よく知らないが、半径30kmは普通にあるんじゃないか」

広いな

「あの都は、9つの地区にわかれてる。ひとつは中央地区、ひとつは東地区、ひとつは西地区、ひとつは北地区、ひとつは南地区、ひとつは北東地区、ひとつは南東地区、ひとつは北西地区、ひとつは南西地区だ。ギルド本部は南西地区にあるぞー」

ふむ、ややこしいな

「あー、クウ。わかつてると思うけど、尻尾と耳は隠せよー」

「はい、わかつてます」

「……………」

「どうかしましたか、ミイさん？」

「いや……なんだ……なぜケットシーはそのボロマント一枚しか着てないんだー？ 他に着る物がないのか？」

「これですか？ これはお母さんから貰った物です。いつも着ているので、そんなに気にしませんでしたが……これではなにかいけないんでしょうか」

「いや、そうじゃなくてだなー……その……恥ずかしくはないのか？」

「はい？ 当たり前じゃないですか」

「当たり前なのか……」

「えっと、クウちゃん。つまりミイさんが言いたいことは、その服は目立つからなにか他に着た方が良くってことじゃないかな？」

「ナイスフォローだ、水色」

「色で呼ばないで……」

「目立つ、ですか。確かに、私のこれは周りの人たちといろいろと違いますね……」

「んー、クウ。街に着いたら、とりあえずギルド行く前に新しい服

を買いに行ったらどうだ？」

「そうですね……みなさんのお邪魔にならなければ、行ってもいいかもしれませんね」

「だってよ、光蛇」

「わかった。とりあえず今日はもう夕方遅いから、防具屋に行ったらあと宿で一泊し、明日アーミーのギルド本部に行くでしょう」

「あいよ」

「巳依さんはどうするんだ？」

「んー？ なんだ？」

「俺たちと宿に泊まるか、ギルドに戻るか」

「一泊する。お前ら、私が案内しないとギルドの場所わからないだろうー？ それくらいは予想できるだろクズが」

「ふああ……眠い……」

「そればかりだな……霊介」

まあそんなこんなで、俺たちは大陸中央の都、エノリークへと到着した

……そして西地区の防具屋を捜し当てるのに、15分を消費した
巳依が地形に詳しいと思ってたのに、こいつは南西地区しかよく知らないらしい

「ふああ……眠すぎる」

俺と光蛇、男二人は邪魔になるだけなので、外にあった階段の端に腰掛けて女三人が防具屋から出てくるのを待っていた

「それにしても、まさかお前の幼なじみがこの世界に着てるとはな」

「あー……この勢いだと師匠とかも出てきそーだなー」

「お前、確かその師匠とやらを追いかけてあの高校に入ったんだっ

け」

「まあ、そーだな。負けっぱなしは嫌だから。そのせーで巳依とは違う高校になっちゃったけど」

「俺とは同じになったけどな」

「最悪だ」

「なんでだよ」

「じょーだんだよ」

あー、それにしても

「眠い……」

「またか」

「しかたないだろ、眠いんだから」

「……まあ、最近は戦闘が多かったからな」
「確かに」

と、そんなとき

「……？」

なにか……聞こえたような……

「光蛇」

「ああ、なにか聞こえた」

………

「………サンダー………」

聞こえた！ 呪文と雷撃が

「光蛇！」

「行くぞ」

） Side：???? ）

「追いつめたぞ！」

私の目の前に、いきなり男が現れた

「逃がさない」

後ろからも、声が聞こえた

「うー……なによー、あんたたち……」

細い街の路地で、私は何人もの男たちに囲まれた

「大人しく捕まってもらおう」

「誰があんたたちなんかに……バースヴィズナ！」

……魔法が、発動しない

「無駄だ。魔法を無効化する魔法がこの周囲にかけられている。お前のお得意の魔法は、ここではただの役立たずだ」

「魔法を無効化する魔法って……そんなの……」

「さあ、選んで貰おうか。大人しく捕まるか、死ぬか」

まだ……捕まるわけにはいかないんだ
私は……まだ完璧になれてないから……

「誰か……助けて……」

「古代の文明をぶつつぶしに参りましたー！」

〕 Side out 〕

俺は細い路地にいた数人の男たちに向けて、
現代武器DEデザートイーグルを構える

ガガウンツガウンガウンツッ！！

「ぐあ」「なんだ！？」「この……」

あ、しっかり頭は外したから

「光蛇！」

「わかってる！」

そう言つと、柄から剣を抜かず、柄で男共を殴って気絶させてゆく

「ち、新手か！」

「新手とか（笑）」

つと、まずいな。後ろからなんか来た

俺と光蛇はそれを確認した後、さっき倒した男共を踏みながら路地に入る

「大丈夫か？」

光蛇が襲われてた女の子に声をかけた

「う、うん」

忙しいから詳しい観察は省くけど、紫色の大きな瞳と、なんか凄そうな髪飾りに、紫色の短いポニーテールの髪。服はなぜか白衣で身長は140前後

「つと、囲まれてるぞー、光蛇」

「みたいだな」

今来た方角と、その逆側からさらにたくさんの男共が走り込んでき
くる

「どうする、光蛇」

背中を合わせて、どちらがわにも対応できるようにしてから聞く

「そうだな……よし、決めた。全ての敵の戦滅は不可能だから、一点突破をして逃げきろう。突破したら、俺が時間を稼いでやるからお前はその子連れてここから離れる。あとで合流しよう」

「ん、わかった」

光蛇は判断が早くて助かる

「んじゃそーゆーことだから、お手を拝借」
「え？」

俺は白衣少女の手を掴む

「光蛇、頼む」
「わかった」

作戦開始だ

「 Side：ルー・シウラシベル 」

「それで、何か欲しいような服はあるのかー、ケットシー」

私、ルー・シウラシベルは、いま、クウちゃんの新しい服探しに
防具屋へ来ていた

「特にありません」
「ないのか」
「はい」
「えっと……クウちゃん、とりあえず見て回って見たらどうかな」
「そう、ですね。わかりました」

魔法使いが着れるような布系の服が展示されている方へと、クウちゃんを巴依さんといっしょに連れていく

私の職業ブレイブハンターは、いわゆる魔法剣士に分類される魔法で作り出した武器を扱い戦う魔法使い、というものを想像してくれて構わない。装備できるのも、やっぱり布装備だけ

そして、この職業は他に比べて攻撃力が高く、しかも武器を必要としない。防御も完璧にできて、いろいろと便利な職業だ

「うーん……どれがいいんでしょうか」

「ひとつも欲しい服がないの？」

「はい」

即答だった

「これなんかどうだい？」

と、巴依さんが指さしたのは

「えっ？」

浴衣だった

「いいんじゃないでしょうか」

巴依さんはその反応を見てクスクスと笑っていた
わざとだ、きつと

「クウちゃん、あれは特別な時にしか着ない服だから、他のものにしてっ？」

「そうなんですか、わかりました」

クウちゃんは、常識が無くて困ることが多々ある

眠っているリヨウスケの隣に寝ようと言いだしたり、大きなボロマントという不思議過ぎる出で立ちだったり、今みたいに何も知らなかったり……

これも、半モンスターとして迫害されてきたからなんだろうか……

「……」

そういえば、私も最近、新しい防具は買っていないなあ……

防具や武器も、破損しすぎちゃうと崩壊したりするから、管理もしつかりしないといけない

リヨウスケが使っていた短剣が、良い例だ

「私も、買おうかなあ」

「浴衣をか？」

「違うよ」

とりあえず、今着ている服を確認してみる

帽子付きの、黄土色の上着。それにお気に入りの藍色の服とスカート

実はこの服とスカートはINTとWISを少し高めるという特殊効果があるのだけれど……

「……うーん」

どうしようかなあ……

服、変えればリヨウスケは喜んでくれるかな……

「って！ 違う違う！ そうじゃなくて……」

うー……やっぱり、いいや。このままでいよう……

「あまり複雑ではない服がいいです」

「「複雑……」」

……まだまだ時間がかかりそうだなあ

〕 Side out 〕

「フレイムドライブ！」

光蛇の炎の二連撃が発動し、相手をなぎ倒す

「もういっちょ」

「フレイムスピン！」

ん、確かこれはLv39で覚えた新技だったな

さらに大きな炎を纏った剣を、光蛇は豪快に振り回した
そして、道が開く

「行け！ 霊介！」

「おーけー」

俺は少女の手を引いて、走り出す

「行かせねえ！」

と、いきなり目の前に三人の男共が降ってきた

「邪魔だ！」

レベルオプシオン、Lv50、AGI特化、制限時間2秒！

『認証しました。スキルを発動します』

「つりや！」

その男共の合間を、俺は一瞬で走り抜けた

2秒経ち、結構な疲労が襲ってくる。まあ、このくらいならだいたいじょーぶだ

「おっとと」

白衣少女の手が離れそうだったから、持ち方をお姫様だっこに変更
なんか白衣少女が赤面したが、そんな場合じゃないから無視

「んじゃ、後は頼んだぞ光蛇！」

「まかせろ」

光蛇は現在、俺が抜いた三人を倒しているところだった
レベルオプシオン、Lv変更無し、AGI特化、制限時間30秒

『認証しました。スキルを発動します』

さあ、たっぷり逃げよう

《死神》との対面

走り、走り、走り、最後に細い路地に飛び込んだ瞬間
ゲージが0になり、疲労が襲ってくる

「はあ、はあ、はあ……疲れた」

フラフラと何歩か歩いた後、壁にもたれ掛かった

「あー……レベルオプションは連発するもんじゃないな」

「え、あ、その」

「ん、なんだー、白衣少女」

「は……」

「は？」

「離せえー！ー！ー！ー！」

あ、ずっとお姫様だっこしたまんまだった

「つて！」

暴れんな……今……疲れて……

「うあ」

ほら、やっぱり倒れ……え？

「ちょ、やば……」

「え？」

倒れた俺の真上に、白衣少女が落ちてきて……

「っ!？」

まるで頭突きするみたいに、俺たちはキスをしてしまった

〕 Side：香川光蛇 〕

「終わりだ」

最後の一人を、俺は斬り伏せた
以外に、あっけなかったな
見たところ、ほとんど戦士はいなかったからな

「で、お前らはいったい何者だ？」

俺、香川光蛇はまだ意識を保っていた倒れている男に歩み寄り、
剣先を突きつけた

「誰が……教えるか」

「なら、殺す」

もちろん冗談だが……

「ち……俺たちは、『リビングデッド』だ」

三大ギルドか……

「どうしてあの少女を襲った？」

「それは………あいつが、ま」それ以上は、だめ」

その女の声が聞こえた瞬間、今俺が脅していた男が黒い炎に包まれた

「うあああああああ！！」

そして、死ぬ

「……誰だ」

慌てるな……冷静を装え

「……リビングデッド。幹部。《死神^{ヘル}》、ノア・フレデル」
「幹部……！」

まずい、な

そんな奴と無闇に戦うわけにはいかない

「あなた、危険、殺す」

突如、空間が揺らぐ

揺らいだ空間に色が形成されていき、その揺らぎが次第に元に戻った

その時、目の前には白銀の髪を持つ赤いローブに身を包む少女がいつのまにか立っていた
その手には、大きな鎌

なるほど、《死神^{ヘル}》、か

「死んで」

そしていきなり俺の体が、黒い炎に包まれ……

「ダメだよ、霊介のお友達殺しちゃ」

いきなり現れた黒い炎は、いきなり現れた年下の少女によって消された

「……魔女」

「久しぶり、ノアちゃん」

「……状況、変わった。撤退する……」

「えー！」

「魔女、危険。それに、近くに、あのサムライ、いるかも」

「お兄ちゃんはいないよー」

「……撤退」

そう言った《死神^{ヘル}》は、再び空間に飲み込まれるように「ここから消えた」

「つれないなー」

「……助かった。ありがとう」

「んー？ コータくんだよなー？」

「あ、ああ」

なんだろう、この子は
黒髪に黒眼だから、元の世界から来たように見えるけど……

「早めに来ちゃったー」

「……？」

「アーミーの、幹部？　だよー」

「明日、待ってるよー、コータくん」

「あ、ああ」

最後にそう言つと、この『アオイ』という少女も空間に飲み込まれるようにして消えた

「……」

リビングデッドの幹部……か

確か、霊介も酒場でリビングデッドの一員の吸血鬼に会つた、と言っていたな

「……穏やかじゃないな」

リビングデッドの……奴らの目的は、なんなんだ？

「それも含めて明日、聞く必要があるな」

さて、そろそろ防具屋に戻るか
霊介も、いればいいんだけどな

Side out

「うあああああああ!」

「あう×§%＃/”：! * & a m p ; % ÷」

俺はなんの気遣いもなしに、白衣少女を突き飛ばした

「……………」

マズイ、ヤバイ、これはだめだ、やばすぎる

ロリコンだとかそうじゃないとか関係なく、いろいろとマズイ、マズすぎる

白衣少女は湯でダコ状態だ。俺もたぶん赤面してる
くそ……………なんてことを……………

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「変態い……………!」

「うおお!」

いきなり魔法を連発して来やがった

めちゃくちゃで命中精度は悪いけど、もの凄い数なのでヤバいつてゆーかなり強力な魔法ばかりなんですけど!?

「し、しかたない。レベルオプション!」『認証しました』

LV50、WIS特化、制限時間5秒

『スキルを発動します』

こ、これで魔法防御力がかなり上がるはず

「うおおおおおおお!!」

叫びながら、俺は魔法の嵐へと突っ込んでゆく
いくつかの魔法が当たるけど無視

「うおりゃ!」

そして白衣少女の両手を掴み、魔法を止める

「っ! 離せえー!」

「ごはっ!」

蹴りの威力も……ハンパねえ

「バースヴィズナあ!!」

そして少女は、この超至近距離で特大の闇の球を……

「レ、レベル変更、70!」『認証しました』

ドガウアアアアンツツツツ!!

「ゲホゲホッ……」

地面の石床が砕けて、盛大に砂埃が舞う

「う……お……」

疲れ…… たな

最後の1秒未満は、Lv70にもしたからなあ
まあ、Lv100のあの時よりは疲れない
すっかりぐっすり寝れば平気そうだ

「……で」

俺は、倒れているそいつを見おろす

「……自滅かよ」

まあこれだけ近けりゃこーなるわな

「おい、だいじょーぶかー？」

しゃがんで、頬を叩く

「んー……」

そしてゆっくりと目を開け

「っ！ 変態！」

「こぶっ……」

溝打ちされた……

「うー……バーカ！」

そう言つて、その白衣少女はどこかに走つていつて、やがて消えた

「……まあ……いいか」

記憶消去しよう

「さて、と。ぼーぐやに戻るか」

そーいや、新しい武器も買わないとな

……まあ、それはまだいいか

防具屋の前に戻つてくると、丁度光蛇も歩いて来た

「無事かー？」

「ああ」

つーか、まだクウたちは防具屋の中にいるようだった

「あの女の子はどうした？」

「逃げられた」

「大丈夫なのか？」

「あれだけ強力な魔法使えれば全然だいじょーぶだつて」

「……そういえばお前、ボロボロだな。なにかあったのか？」

「……………」

言えるかつ!!

「いや、突然攻撃された」

「……そうか」

あれ？ あんまり詮索してこないぞ

「そっちはへーきだったのかー？」

「ああ、以外とあっけなかった。ただ……」

「ん？」

「……いや、なんでもない」

なにこの思わせぶりの態度。教えるや

「……俺も、お前も、そろそろ新しい武器防具を買った方がいいかもしれないな」

「どーした唐突に」

「俺は特に何の効果もない低級防具、お前も性能は『旅人の服』とほぼ同じようなもんだろ？ DEはともかく、お前は短剣を現在持っていない」

「まー、そーだな」

「モンスターと戦ってきてまだGに余裕があるし、また明日、俺たちも何か調達してみたらどうだろうか」

「ギルドに行った後？ 行く前？」

「已依さんをあまり待たせるわけにはいかないからな。行った後だ」

「ん、了解」

「……それにしても」

今度はなんだよ

「アーミーの団長は、お前のことを聞きつけて俺たちを呼んだんだよな」

「そーっすね」

「なら、団長は……霊介の知り合いの確率が高いんじゃないか」

……ああ、なるほど

「でも俺、知り合いなんて数えるほどしかないぞー」

「そうだな……例えば、お前の師匠とやらはどうだ？」

「師匠か……まあありえる」

ステータス補正がなくてもあいつならこの世界でも無事で生きていられる気がする……

「まー、考えなくても明日すぐわかるって」

「だな」

……ふうああ……また眠くなってきた

まー……レベルアップション使いまくったからな……

今日はぐっすり寝よう

「おいそこのバカ二人。終わったぞ」

つと、聞き慣れた酷いいいがかりが後ろから

「やっと終わったか」

「早く寝たい……」

と、俺たちは立ち上がりながら振り返る

「ん……」

「どうでしょうか、リヨウスケさん」

クウは、新しい防具を着けていた

まあ……なんというか……ファイナルファン。ジーとかに出てくるような、白魔導士の服に近い

違うところと言えば、あの服の赤い部分が青になってるところぐらいだ。それ以上詳しくは、よく見ないとわからない

あ、あとこれまで履いてなかったけど靴も履いてた

「……いいんじゃないか」

帽子着いてるから耳も隠せるし、尻尾もこれなら隠せる
ただひとつ気がかりなのは……

「けど、サイズ大きすぎないか？」

「これが最小サイズです」

手が服から出てないし……

「まあ……うん。主人がペットを大事に扱う的な意味で可愛いよ」
変な意味ではなく

「なんだ、ロリコンか」

「うつさい黙れ、已依」

決して変な意味ではないと断言しよう………たぶん

「あ、ありがとうございます」

クウはそう言って、笑っていた

「じゃあ、宿に行くぞ。とりあえずクウは耳と尻尾を隠しておけ」

ん、あ、ホントだ。言われるまで気づかんかった。クウ尻尾出てるし、帽子着けてないし

「あー、早く宿行って休みてー」

まーいろいろあったけど、俺たちはこーして今日この日の出来事を終えた

アーミー本部にて（前書き）

遅れてすみません。

代わりに、今回いつもより長いです。

アーミー本部にて

Side: 《死神^{ヘル}》

「やあノアちゃん。君の追う白衣少女はどうだったー？」
「……リノ」

ここは、北地区のとある酒場。悪人専門の暗殺や強盗の依頼が回ってくる場所

「逃がした。コウタという奴と、魔女が、邪魔をした」

「コウタ？ ……あ、リヨウスケのところのパーティーリーダーかあ」
「リヨウスケ？」

「うん。なんかね、凄いよ。見たこともない武器とかスキルを使うんだ。今のボクのお気に入りだよ」

「……危険？」

「うん？ ……まだわからないよ。化けて出るかもね」

「……可能性は、早めに潰すべき」

「あは。あれはボクの獲物だよ。いくら君でも、手を出せば殺しちゃうよ？」

「できるの？」

「殺せるよ、君くらい」

彼女は、簡単に答えた

「……もし、邪魔してきたなら、殺す。良い？」

「まあ、そうなっちゃったら別にいいよ。でも、君にあいつが殺せ

るかな？」

「……」

「とりあえず、ボクは適当に見学でもさせてもらつよ。楽しませてね」

「また、お得意の、マインドコントロール？」

「あは、教えるわけないじゃん」

「……」

「それじゃボクは、とりあえず中央地区の城内でも探検してみようかな。また会えればいいね、ノアちゃん」

「……」

「じゃあね」

そう言つと、リノ・ヴィレナドルマは、壁に溶け込んで消えていった

） Side out ）

次の日、朝、8時ジャスト

俺たちは已依に連れられて、南西地区へと向かっていた

「まだ寝ていたいんですが」

「お前は9時間以上寝ていただろうが。バカか」

相変わらず手厳しいことで
しかたないだろ、レベルオプシオン使いまくったんだから

「アーミーの団長に会ったよね」

ルーちゃんが聞いた

「ああ、そうだな」

「……変な人だったりしないかな」

「ん、そーいやMSCのリーダーって性格最悪なんだっけ」

「うん……」

「巳依より悪い？」

「おい霊介。それはどういう意味だ？ 死にたいのかー？」

「リヨウスケたちなんかとは比較出来ないほど最悪だよ」

「そ、そっすか」

俺の完全無視モードや巳依の毒舌モードを軽く越えるのか……

「……zzz」

つーか、クウは歩きながら寝てるんだが……

「アーミーの本部は、どういところなんだ？」

光蛇が口を開く

「学校だ」

「……は？」

「なんだ？ 二回言わないとわからないのかバカ共。ソピエト学園
とか言う学校がギルド本部だ」

……かくして

時代の枠を越えて俺たちは現代の文化物へとたどり着いた

南西地区にある一番ヘンテコな建物、その名もソピエト学園
もろ、ソピエト社会主義共和国連邦（もといロシア）をパクっ
てるけど、いいんだろうか

しかも校章は日本の国旗……
ギルドマーク

これだいいじょぶか？ 法律的な意味で

あ、この世界って元の世界の法律とか関係ないんだっけ

……とりあえず、その学園の校長室に、団長がいるらしかった

「ここだ」

已依に案内されてたどり着いた、校長室
そこは、その扉は見るからに

「ふつーだ」

クウやルーちゃんは物珍しげにいろいろ眺めてたけど、俺たちに
とっては、もはや見慣れた景色だ

つーか構造は、元の世界で俺が通っていた高校とほとんど同じで新
鮮味がなかった

……なに、ここ

「……これは、確実に霊介の知り合いが団長だな」

光蛇の呟きに、俺は無意識に頷いた

「入るぞー？」

そつ已依が確認すると、二回ノックしてから扉に手をかけた
が

「……」

いくらノブを回しても、開かない

「ふんっ！」

痺れを切らした巳依は、扉を蹴飛ばした
すると「うぎゃ」という悲痛の叫びが聞こえ、ドアが外れて吹っ
飛んだ

……こいつ、本気で蹴っただろ

「いたーい。なにをするの巳依ちゃん！」

「お前が遊ぶからだ、バカが」

下を見ると、こりやまた黒髪黒眼の少女

「ん……」

……どっかで見たような……

いや、気のせいだ。そうに違いない

ショートヘアの黒髪を二つ結びにしている、顔にはまだ幼さが残
っている

服装はなぜか元の世界で俺たちが通っていた高校の制服。赤いリ
ボンが1年、青が2年、黄が3年なんだけど、この制服は青のリボ
ンだ

そして、巳依と同じ黒のリストバンド（実はこの模様、日本の国
旗だった）

「うーん……なんか引つかかるなあ」

「えー、覚えてないの霊介！」

「……記憶にない」
「あう……」

少女は膝をつき、o r zの姿勢になった
o r zを知らない読者は、w i k iとかで調べてb

「はは……まあ予想してたことだけだな」

と、部屋の奥から男の声が聞こえてきた

「お兄ちゃん……慰めて」
「え……よしよし」

と、その男はo r z少女の頭を撫で……
え、あれ……こいつ、見たことあるぞ
……誰だっけ……

「久しぶりだな、霊介」
「誰だっけ」
「俺も忘れられたのか……霧林蒼都。まだ思い出せないか？」

霧林蒼都？
きりばやし あおと

「……え、師匠？」
「ああ」

「じゃあそのo r z少女は、葵？」
「そ、そーだけど……o r z少女って……」

おお、懐かしい

表示名の方も見ると、蒼都はアオト。葵はアオイと表示されていた
師匠も学校の制服を着ていた。でもリボンの色は、なぜか黒だった
あ、そーいや教師もリボン付けてたっけな。あれ黒だったなあ
師匠はいつも通り微妙な長さの黒髪に少しだけ幼さが残る瞳。昔、
葵と、女装してもバレないんじゃないか、というような話もした記
憶があるような無いような

「それじゃ、中に入って。霊介たちは、いろいろと聞きたいこともあるだろうし」

団長（もとい師匠）に呼ばれ、俺たちは部屋の奥へと足を踏み入れていった

「まずは自己紹介から、かな」

師匠が切り出した

「俺は霧林蒼都。職業はサムライで、このギルドの団長をやらせてもらっている」

「んー、じゃあ次は私！ 私は霧林葵。15歳、中学三年です！」
「で、次はレート」

と、師匠が声をかけたのは背が高い青年

「レート・ヴィレナドルマ。歳は17。吸血鬼だ、よろしくな」

少し前髪が長い茶髪に、赤く鋭く光る瞳。身長も結構高く、服装は黄色のリボンの制服だ
もちろんリストバンドを着けていた

「干支夕希だ。俺は全てが謎なのだ。教えることはなにもない!」

最後の奴は厨二病か

白髪に赤眼。まあどーみても頭は染めてるだけだし、目はカラーコンタクトだ

服は赤いリボンの制服……と黒いマント

「はは……こっちは、個性豊かな奴らが多いな」

「俺は香川光蛇。Lv39のフレイムバスターだ」

「……あ、俺？ 青柳霊介。詳しくは言いたくないので後略」

「クウ・バルハルトです。えっと……モンスターウィザードです」

「ルー・シウラシベル。Lv31のブレイブハンター。ギルドMS Cに所属しています」

ふう、これで全員か

「じゃあ話を「待てバカが」」

あ、巳依が余ってたっけ

「いや、でも巳依はもう両者知ってるわけだから自己紹介無しの方
向で良くないか？」

「だ・め・だ」

そーっすか……

「私は篠崎巳依。モンスターコントローラーだ」

「それじゃあ、まずはこっちの話を聞いてもらいたいんだけど……
いいかな」

師匠が言う

「いーよ」

「ならまずは、この世界について説明でもしようかな。

……そうだな。この世界のことを、俺たちはゲームの中だとは捉えていない。とりあえず、今はまだ正体不明の異世界と捉えている」

「だが、夢に現れたあの男はゲームの中だ、と……」

「確かにそう言っていたけど……その可能性は低い」
「なぜ？」

「俺は、『あちらがわの世界』から来た人たちに、もう何十、何百人と会っているんだ。けど、誰も『ゲームのタイトル』を知らない。こんな正体不明なものは、楽観的にゲームだと捉えるべきではないと、俺は主張したい」

HPやMPゲージの説明はできないけどな、と続けて言った

「さらに、それらに伴いひとつの問題が発生した」

「問題？」

「ああ。ゲームクリアの方法が、わからないんだ」

眠い……寝ていいかな

「……なるほど」

「俺はそれを調べ、ゲームクリアを目指すためにこのギルド、アーミーを作ったんだが……いつのまにか、三大ギルドなんて呼ばれるようになった」

でも寝たらだめだ。今は大事な話の最中なんだ

「話を戻すが、俺はまだゲームクリアの鍵は見つけていない。それ

はもしかしたら、世界中を平和にする、みたいなものかもしれないけど……」

と、師匠は微笑しながら言う

「可能性は、見つけた」

「可能性？」

「ああ。ギルド、リビングデッドは、知ってるよな？」

「ああ」

「あのギルドの最終目的、知ってるか？」

「……」

「世界征服だよ」

……うあ。今、寝かけた。危なかった

「奴らは魔神を解放し、世界を滅ぼすつもりらしい。とんでもないホラ話にしか思えなかったが……以前、北西の名も無き神殿にて見たこともない凶悪なモンスター、魔神の一匹が解き放たれた」

「……！」

「もちろんそんなやつは野放しにはできない。MSCの奴らと協力して、辛うじて撃退した。まだ死んではいけないけどな」

「そんな話、私は聞いたことがないけど」

ルーちゃんが言った

「あはは……これ、実はトップシークレットなんだ。幹部以上しか知らない」

「……」

眠すぎるぜ……。

「このことについて、光蛇くんはどう思う？」

「……魔神を復活させんとする、ギルド。それを潰し、魔神の復活を防ぐことが、もしかしたら……」

「ゲームクリアかもしれない？」

「そうだ」

「俺たちもそう捉えた。だから、俺たちの現在最終目的は、リビングデッドを潰すことにある」

「なるほど」

「ま、口で言うほど簡単じゃないんだけど……俺たちの知っている『ゲームクリア』についての情報は、これくらいかな」

「とても参考になった。ありがとう」

…… z z z …… って！ やばい今寝てた

「他に伝えられることは……、『あちらがわの世界』からこの世界にやってきた人たちの、特殊能力かな」

「俺はそれを、『データスキル』と命名した」

この厨二病患者は、かつこいい名前をつけるのが好きみたいだ。よくいるよね、こーゆー奴

「あはは……えっと、そのデータスキルというのは、『あちらがわの世界』から来た人間だけが扱える特殊な力なんだけど……知ってる？」

「知らない」

「たとえば……うーん……えっと、巳依ちゃん？」

「なんだ？」

「なんでもいいから、『存在しないはずの生き物』を出してくれる？」

「わかった。ほら」

と、巳依が宙に手をかざすと……

地面に魔法陣？　みたいなものが形成されて、突然あの羽生えた
キモい馬、ユニコーンが一匹出現した

「これが私の……特殊な力とやらだ」

「《データスキル》と言え！」

「黙れゴミ。死にたいのかー？」

「はは……えっと、名前なんだっけ、夕希」

「《モンスターピュアレント》だ！」

「だからその呼び方やめろ、ゴミが！　殺すぞ！」

「その《モンスターピュアレント》という力は、本来『存在しない
はず』のモンスターを呼び出せる、という特殊な力。これがデータ
スキルだ」

「それは、絶対に誰もが持っているのか……？」

「ああ。俺も、葵も、夕希も、巳依ちゃんも……そして光蛇くんと
霊介も、持っているよ」

「ちなみに俺のデータスキルは、《エンドレスミックス》！　配合
後のアイテム個数を、無限に増やすことができるのだ！」

「少しは静かにできないのかゴミ！　次は殺すぞ！」

「あ、あはは……えっと、データスキルは、気づきにくかったり、
気づきやすかったりいろいろな種類があるから、もしこれまでに心
当たりがなくても、心配しなくても大丈夫だから」

……もうだめだ。おやすみなさい

「うーん……ここまででなにか、質問はないかな？」

「はい！」

「えっと……じゃあクウちゃんどうぞ」

「私にもそのデータスキルって使えますか？」

「無う理だあ。これは選ばれし者たちだけが「おいゴミ。どんな死に方が良い？　できるだけ希望通りにしてやる」」

「あ、あはは……えつと、でも、夕希の言うとおりだよ。データスキルは、『あちらがわの世界』から来た人にしか使えないんだ」

「そ、そうですか……」

「俺のそのデータスキルとやらは、どういふものなんだろうな……」

「気になるのか？　気になるよなあ？　俺は知っているぞ！　全てをゴホア！」

「死んどけ、ゴミが」

「とりあえず、俺から伝えられることはこのくらいかな。残りの用事と言えば、アーミーへの入団を希望したいことと、霊介と少しの手合わせをしたい、くらいかな」

「……そう言えば、やけに霊介が静かだな」

「こつちも、葵とレートが静か過ぎるような……」

「「寝てる……」」

「……あ！

「あ、いや、寝てないよ。マジで」

ふう危なかった。ギリギリセーフ

「わ、私も寝てないよお兄ちゃん」

「俺は目を瞑って脳を休めてただけだ」

「レート、それ、寝てるって意味なんだけど……」

よかったー。寝てたの俺だけじゃないのか

「話は戻すけど、どうかな？　入団してくれると助かるんだけど……」

「……」

「……いや、その話は断らせてもらおう」

「理由を聞いても、いいかな」

「……笑わないか？」

ん、ああ、もしかして光蛇、あれを言うつもりか？

「笑わないよ」

「……俺は、勇者になると決めた。だから、ギルドのようなものに入るのではなく、俺たちで最善を尽くす、ということをしたんだ」

「あなたとは、良い友達になれそうな気がする」

「黙ってるゴミ」

「ゴホア！」

「効率が悪いのはわかってる。だけど、俺はそうすると決めたんだ」

この世界に来てから一日目、こいつは勇者になるとか言ってたからなあ

「気に入ったー！ この人面白いよお兄ちゃん！」

「……はは。それ、いいなあ。良い目的だ」

おお、意外と好評価

「じゃあ、こういうのはどうかな。お互いに情報を交換し、危険になれば手を貸し合う。そういう関係は？」

「それは願ってもないことだ。是非頼みたい」

「交渉成立、かな」

「フツ、では俺が、貴様らに二つ名を与えてやろう」

「ダメだこのゴミ。処理しても無駄みたいだ」

「いいんじゃないか？ 面白そうだし」

レートの好評価が得られてる……だと!?

「そー言えば、お兄ちゃんとか私とかリビングデッドの人たちかに変な呼び名を付けて広めたのつて、ゆーきくんだったよねー」

「変な呼び名などではない《最終決戦》よ」
ラゲナロク

変すぎるだろ

「ちなみに、リビングデッドの幹部どもの二つ名、《死を誘う者》
インサイテッド・デスや《死神》ヘルなどを付けたのも、俺だあ!」

災難な奴らだ

「ちなみに蒼都は《最強の剣士》エス グリミド、巴依は《絶対王政》インベリアル・アブソリュート、そして俺は《無限》インフィニティだ!」

「俺は?」

「レートは《強神の拳》ストロンガーフィストだ」

「おお」

クウが興味津々だ

俺たち、乗り気じゃなかったのに、これだと断りにくいじゃないか

「……俺たちは、どうなるんだ?」

光蛇もしぶしぶと言った感じに聞いた

「ならば命名してやろう。光蛇とやらは、《炎帝》フレイムエンペラー。ルーとやらは《蒼空の星》アルト メソクト。霊介とやらは……《成り損ないの救世主》ル ウェルド。そしてクウちゃんは……」

「わくわく」
メノス
「《最前線の風鈴》」
ウインド

V S 霧林蒼都？

とまあ、いろいろあって……

「それじゃ、霊介。ハンデはどうする？ 片手使わないとか、移動しないとか、なんでもいいぞ」

「いらん」

……どーしてこーなったんだ

「頑張れ、霊介」

「リヨウスケさん、頑張ってください！」

「頑張つて、リヨウスケ」

俺がいま頑張りたいことは、ここから逃げることだが

「どうせ負けるだろ。期待するだけ無駄だ」

いまだけは激しく同意するよ……巳依

「おにーちゃんなんかやつつけちゃってりょーすけー！」

いや、葵……お前、俺より師匠の方が強いって一番知ってるだろ

「よつと」

で、レートはなにやってるんだ？

「コインは表か。よし、俺はアオトに500G賭ける」

ギャンブルかよ！

「ほら、あと十秒だぞ」

デュエル開始のカウントダウン、残り10秒

「あー、くそ。やるしかないか」

これより15分……？ 30分だっけ？ まあどっちでもいいーや。
そのとき、俺たちは話を終えて帰ろうとしてたんだが

「霊介は、結局戦ってくれないのか」

「もちろんだ」

「はは……即答か」

「ちよーっと待ったそこの腐れ装備ども」

黙ってる厨二病。こちとら変な二つ名付けられてイライラしてんだよ

「なんだ……？」

光蛇も落胆を露わにしていた

「見たところ、その光蛇ちゃんと霊介くんの装備はどーみても初期

装備並みではないか」

ゾクツとした

「だかゴホア！！」

言葉が続けようとした厨二病（名前なんて覚えてない）を已依と葵が蹴り飛ば……いや、蹴り潰す

「おい貴様。今なんて言った？」

「霊介は、くん付けが苦手なんだよ！ 前にそう言ったよね」

「ず、すみませんでした」

「あ……あはは……でも、今のは夕希が悪いかなあ」

そう言えばこの三人は、俺が心底嫌っていたあのストーカーのこ
と知ってたんだっけ……

……今回ばかりは、こいつらが良い奴だと認めざるおえない

「で、なんだ」

光蛇はそれらを一瞥してから、続きを聞く

「あ……ああ。だから俺が、お前たち二人の新装備を作ってやろう
か？ という提案だ」

「怪しい。ウザい。却下」

「悪いが、もっと信用のある人に作ってもらおう」

俺と光蛇は同意見だった

「あはは……信用ないなあ、夕希……けど、二人とも」

と、師匠が俺たちを呼び止めた

「こいつは、アルケミストとしての腕だけは確かだ。頼んでみた方が、得すると思うよ」

そいつ、アルケミストか

アルケミスト＝錬金術師。まあ、配合のスペシャリストだな

「どうする光蛇」

「……………しかたない、頼むか。どうせ新装備を買おうと思っていたところだ」

わかる。わかるぞ。お前は凄く悩んだんだ

「では、特別に君たちの新装備を、無料で作ってやるわけではないかあ！ なにかリクエストはあるか？」

「「ない」」

「即答！？ 少しくらいはあるだろ」

「あえて言うなら、黒い布装備。あと少し長めの短剣」

「できるだけ軽く、丈夫な装備が良いな。布でも革でも金属でも、なんでもいい。武器は炎属性のつく剣がいい」

「なんだ。ちゃんとリクエストがあるではないか」

「「お前には無理な注文だと思ってた」」

「ハモるな！」

とまあそんなわけで、それらができあがるまで師匠とデュエルす

る、という話になってしまった

「あー、くそ。こうなりややけくそだ」

ちなみに俺の武器は、アーミーの武器倉庫にあった小刀を借りている

DEは、まだ隠しておく

もしかしたらDEのことバレてるかもしれないけど、不意をつくために隠しておく

「さあ、勝負だ霊介」

そして今、デュエル開始を告げるカウントダウンが、0に変わった

「おさきにどーぞ」

「遠慮なんかいららないな。霊介から来いよ」

「……」

しかたない、行くか

俺は小刀片手に、走り出す

ちなみに師匠の装備はただの日本刀だ。あれも確か倉庫に入ってたやつ

まあ、公平にするためにわざわざ武器も合わせてきたんだな

「それじゃ、まずは《鏡映し（ミラー）》からやろうかな」

と、師匠が言うと同時に俺は小刀を右上へ向けて斜めに振りあげが、それは師匠の斜めに払う攻撃で弾かれた

「つと！」

さらに、突きを繰り出してみる
すると師匠も突きを繰り出してきて、剣先が体に当たる直前で身を引く

「どうした？ 霊介。この程度か？」

師匠は、攻撃してこない

だが、その理由はわかっている

試すように、次は真横に切り払ってみる

すると師匠も、『まったく同じ動き』をしてきて、剣刃同士が衝突して火花を上げた

「《鏡映し（ミラー）》ってそーゆー意味かよ」

相手と『まったく同じ動き』をすることが、こいつの言う《鏡映し（ミラー）》だ。こいつのことだからほとんどズレもないんだろう
ありえない技術だな。っていうかギネスレベルとか簡単に越えるだろ

元々、こういうことのが天才だったけど……昔はここまで凄くはなかったな

たぶん、ステータス補正のDEXがかなり影響してるんだろうな

「あはは……でも、それでも俺は、霊介のあの攻撃の避け方は真似できないよ」

……？ なにそれ

……あ、もしかしてあれか？ ルーちゃんとのデュエルでも使った俺の得意技か

「こ丁寧に弱点をどうも！」

と、俺は小刀を全力で突き出す
もちろん師匠も同じ動きを……

しかしそこで、俺は左手で自分の体を右側に叩く。俺の体はうまく右側に逸れ、師匠の刀の剣先を空中へ流す

「っ……やっぱり凄いな、それは。真似できない」

師匠には、俺の小刀が刺さっていた

確か……昔、師匠が言ってたけど……この無理矢理体を逸らさせる技術、かなり難しいらしい

俺はこれ、比較的簡単にできるんだけど……運がよかったのかね

「本気は出さないのか」

「出してほしいか？」

お断りだ

と、言いたいとこなんだけど……

こちらら、早めに終わらせたいんだ

「……本気で」

「え、いいのか？」

「とりあえず」

さて、とりあえずもう発砲の準備しとくか

「……じゃあ」

と、お互い距離をとる

「本気で」

そう言つと師匠は、どこからか日本刀をもう一本取り出した

「二刀流!？」

昔は使わなかったぞ。しかも同じ長さの刀を二刀かよ

「しゃべつてゐる暇なんかないよ」

と、気づけばもう目の前で師匠が刀を構えていた

「うお!？」

そして閃光のごとくその二刀を繰り出した
つて、気づくともう目の前にもいない

「はい終わりつと」

後ろにいた

「……はえ？」

イマイチ状況がまだ飲み込めない

「もうHP、半分以下にしたよ」

嘘だろ、と思いつつ確認すると

「……」

残り3/10くらいだった

え、マジで？ いまの一撃で？ いや一撃かどうかはよくわからないけど

っーか今ごろ体が痛くなってきた

あ、そーいやまったく関係ないこと言うんですけど、ここ体育館

「昔より速くないか……」

これはA G Iのステータス補正が大きく影響してんのかな

「あはは……でも昔より遅かったらそれまでだよ」

とまあそーゆーわけで

このデュエルは、こんな風にあっけなく終わった

P / S . 後に確認したところ、師匠のLvは50だった

でもレートの方が実はLvが高いらしい。なんでそれで団長勤まってるのかな

と思ってるにあの中二病が「蒼都のデータスキルは神にも匹敵する」とか言った

よく知らないが、どーでもいいーや

Side: 《死を誘う者》
インヴァデッド デス

「さーてと、遊ぶのもほどほどにして、そろそろ仕事もしなきゃね」

とりあえず……どうしょ

「うーん……よし、決めた」

城の守りも崩しつつ、ノアちゃんの手伝いもしてあげよ

「くふふ……その前に、王宮にお邪魔しないとね」

中央地区、エノリーク城の城門は……確か閉門時は全てを拒絶するんだっけ

「あーあ、人間も考えることがバカだなあ」

なら、城壁から入る

城壁は、世界最高峰の重くて堅い金属を使ってるんだっけ。それを灰色に染めて石の城壁っぽく見せてる

「ボクの前じゃ、無駄なのになあ」

壊すわけでもない。乗り越えるわけでもない

「パラメーション」

城壁を、すり抜ける

「えっと、オウサマはどっちかなー？」

……めんどくさいなあ。こういうのボク、苦手なんだよ

「んー……ゴーストモンスターLv4」

ボクがそう唱えると、一体の大きな黒い幽霊……ダークゴーストが出現した

「ダークゴースト……名前長いな……ダークん、とりあえずゴーストたくさん呼んで、城内を混乱させてくれないかな」

「……」

む、無愛想なやつだなあ

でも命令は聞いてくれた。何十匹ものゴースト、ザ・ゴーストどもが召還されると、それぞれ壁をすり抜けたりしてどこかへ行ってしまう

「んー、じゃあ次は……ボクをオウサマのいそうなところに連れてつてくれない？」

「……」

ん、なんかジェスチャーしてきた

え？ 乗れ？

「はいはい」と

ボクは実体のない自分の体を浮かすと、ダーくんの肩に座った

「レッツゴー！」

ボクがそう言うと、ダーくんは壁の中へすり抜け始めた

「あ、いたいたー」

そう言ってボクはダーくんの肩から降りた

「なんだ……貴様は。この混乱は、貴様の仕業か」
「そうだよ」

オウサマの名前は、ガルバって書いてあった。ガルバ・エノリー
クかあ

服装は、頑丈そうな白い鎧に王冠。そして赤いマント。
長い赤い髪に黒い瞳。そして手には、白銀の大剣

「銀、かあ」

それは、マズイなあ。いくら幽霊でも、ボクは吸血鬼だ

「貴様を倒し、城の混乱をせき止める！」

そう言うと、ガルバは白銀の大剣でダーくんを斬りつけた

「ウア……」

あれ、実体のない相手にも物理攻撃を効かせられるのか
さらにやばいなあ……ボクたちゴーストは、V.I.T.が限りなく低い

「消える」

ガルバはダーくんをもう一度斬り伏せて、倒してしまっ
あーあ、これで召還したゴーストたちも消えちゃった

「次は、貴様だ」

ガルバが、ボクに剣先を突きつける

「……あまり調子に乗るなよ、人間」
「ほざけ」

そしてガルバは、ボクへと大剣を振りかぶる

「消える」

「……」

そして大剣が振り下ろされ……

「ファース」

そこでボクは、ガルバの後ろへと瞬間移動をする

「実体化」

体に、感覚が、五感が戻ってくる。地に、足がつく

「調子に乗るなって言ってるんだ、人間」

そしてボクは、そのままガルバの首筋へと噛みついて

「吸血」

吸血鬼の本領を、発揮した

） Side：《死^{ヘル}神》
）

「……いない」

あれ以来、あの白衣の少女が、見つからない

「探索スキルの書も、役にたたない」

もうこの街から、去ったのだろうか

「……ありえない」

それぞれ街の出口には、私の暗殺部隊が一部隊ずつ待機している
去ったなら、情報が入ってくるはず

「やっぱり、不完全でも、《魔王》の力は健在」

早めに始末するか、仲間に加えるか、手を打たないと

「捕獲できれば、《北の魔王》との交渉も、できるかも」

次は、南西地区でも行こうかな

新装備の実装

Side: 《死を誘う者》
インヴィテッド デス

「う……ぐ……ああ！」

「痛いよねえ……ボク最近、全然実体化しなくて吸血もしてないから、飢えてるんだよ」

「うあ……」

「でもボクは、お兄と同じハーフの吸血鬼だから、あんまり吸血衝動はないけどね」

そう言って、ボクはガルバから離れる。と同時に、ガルバは倒れ伏す

「そういえば、麻痺の効果があつたつけ。最近使ってなかったから、忘れてたよ」

まあ、好都合だ

ボクはポケットからナイフを取り出す

「さあ、ボクの言うことを聞いてもらおうか。もし断るのなら、刺して刺して刺して回復して、また刺して刺して刺して……ずっと無限に繰り返してあげるよ」

痛みの地獄には、誰も耐えられない

Side：霧林蒼都

「うーん。おにいちゃんが勝っちゃうとなんか面白くないな」

「あ、あはは……そう言われても……」

俺と巳依はあのデュエルの後、ギルドの情報収集班から連絡を受け、事情を詳しく聞くために校長室へと戻っていた

その他の人たちは全員、夕希がいる第一理科室へと向かっていった

「レートくんや巳依ちゃんを呼ばなかったのって、どうしてなの、おにいちゃん？」

「巳依は、まだ危険なことに巻き込むには力が足りない過ぎる。レートは……」

「……もしかして、妹さんが関係してるから？」

「ああ……あいつは、リノさんをリビングデッドから連れ戻すためにアーミーに入っただけ……リノさんのことになると、冷静さがなくなる。戦略的勝利が得意なあいつにとっては、危険なことだ」

「……どうしてみんな、私たちみたいになれないのかなあ」

「この世の全ての人間に……それぞれ自分の正義があるから。自分にとって危害になるものは、自分にとっての悪、自分にとって手助けになるものは、自分にとっての正義。俺と葵だって、ただ、互いの正義が手助けしているだけなんだよ」

「難しいなあ」

「はは……」

「でも……なんかそれって、寂しいね」

「さび、しい？」

「うん。だって……おにいちゃんの言い方だとまるで、人と人は永

遠に理解し合うことができない、みたいに聞こえるんだ……」

「……」

「昔はもつとファンタジーみたいな空想的だったのに」

「……大人になったんだよ」

「おにいちゃんが変わったのは、霊介の家族が死んじゃってから」

「！……」

「気づいてないかもしれないけど、おにいちゃん、変わってきてる。まるで、おにいちゃんの『才能』だけがお気に入りだった私たちの両親みたいに」

「……俺は、天涯孤独になって、ふぎこんでいたときの霊介の顔を、見たんだ」

「……」

「見て、思ったよ。ああ、これが現実なんだなって。現実には物語みたいにはならないんだって」

「……」

「霊介に、なんの言葉もかけてやることができなかった。霊介は立ち直れたけど、もし俺が霊介だったら？ たぶん、俺は立ち直れない」

「おにい、ちゃん……」

「俺は、弱いんだよ……みんなみたいに、強くないんだ」

「もつといいよ、おにいちゃん。もつと楽しいこと……話そ？」

……妹にすら、励まされる

「……ああ、ごめん」

その後はきちんと楽しいことを話し続けて、校長室の前までたどり着いたんだ

俺は、両親が大嫌いだった

俺のことをわかってくれるのは、妹の葵だけ

みんなみんなみんな、俺を見てない。見てるのは、俺の才能

運動、勉強……他のことだって大概、簡単にこなすことができた

友人は、いなかった。両親が俺の才能を鍛えるために、それだけに集中させるために、同じ学校の人たちの親を金で雇い、その子供が、俺と仲良くしないようにしたんだ

俺は、弱いんだ。こんなことをされると……なんにもかも、生きることすら嫌になってくる

だから、俺を励ましてくれた葵だけは……絶対に失わないつながりだけは、大切にしたい

そしてある日、出会いがあった

葵が、あいつを……霊介を連れてきた

あいつは違う小学校にいて、偶然葵と知り合ったらしい。学校自体が違うから、親が関係してるわけでもない

最初は半信半疑だったけど……話し合う内に俺は打ち解けていった

……才能を見せることが怖かった。だけど、俺は葵に言われて、

絶対大丈夫だって言われて……才能を、みんなが羨むものを見せた

その時さ……あいつ、どうしたと思う？

はは……無視したんだよ、盛大に

安心した。ああ、こいつは信用できる。こいつも俺を、裏切ってくれないって

あいつは、俺にとって太陽みたいに明るかった。葵も、月のように暗闇に立っていた俺を照らしてくれた

このふたりは、お似合いじゃないかなあ……俺は今でも、そう思ってる

……だからこそ、だ

だからこそ、霊介がふさぎこんでしまったとき、俺は落胆した
こんなに強い人間でも、あんなに生き生きしてた人間でも、こんな風になっちゃうのかって

俺はその頃から、夢を見ることをやめていたんだと思う
夢を見ていいのは、世界が明るく見える人だけだって……

「エノリーク城が、軍を動かした!？」

「この者を、指名手配にして、捕まえた者に賞金をやるとも言っておりまして。さらに、エノリーク城の第一防衛兵器《レイボル》も動いております」

「あの落雷モンスターか……」

そう呟きながら、俺は事柄をまとめた書類を受け取った

『指名手配【レミリナ・アヴァンストリーム】 この者を無力化し捕まえた者には望むままの報酬をやる』と、あとイラストが載っていた

短いポニーテールの紫色の髪に、紫色の瞳。服装はなぜか白衣

「《魔王》……？ こいつが……？」

「その者は、《北の魔王》《東の魔王》《西の魔王》《南の魔王》、どのデータにもあてはまりません。新しい魔王が生まれることなど、1000年に一度あるかどうかですから、恐らくその魔王とやらは、

4人の魔王の誰かと関係のある出来損ないの魔王だと思われます」

「第二、第三防衛兵器や、殺戮兵器系などは動いていないか？」

「急な指令でしたので、そちらは動かせなかった様子です」

「それらを命令したのは、王か？」

「こちらで仕入れた情報によりますと、王をリノという者が脅した、と」

「どうするの、おにいちゃん」

「……………しかたない。レートも含めて、あいつらを全員ここに収集しろ。霊介たちもだ」

） Side out ）

「おい中二病、どーだ？ 配合は終わったかー？」

巳依が第一理科室に入りながら、言った

「フハハハハッ、俺に不可能はない！ もうとっくに完成してるわ」

「黙ってるクズが」

「え、ちょ、巳依ちゃんが聞いたんじゃない」

「面白い人たちですね」

「俺も混ざってきていいか？」

あー………… 巳依も中二病もクウもレートも………… なにこのカオス

「それで、出来上がった装備とやらはどこだ」

「あ、ああ、そこだ」

と、中二病が指さした机の上に

「おお」

確かに、新装備が出来上がっていた

「会心の出来だ。壊すなよ？ いや、壊そうとしても壊れないがな！
フハハハハハッ」
「うっさい黙れ」

已依とハモった

「二人同時に言うなあ！ 傷つくではないか」
「お前、心なんてあったのか」
「いやそりゃあるよ……」

さて、どういう風な物なのか
とりあえず先に防具を見る
名称を順番に言つと、

『月下に在る陰（上）』 ↑ 体装備
『闇を司る靈輪』 ↑ 腕装備
『月下に在る陰（下）』 ↑ 足装備
『影の世界』 ↑ 靴装備
『黒き英雄』 ↑ 頭装備

「ふむ」

見た目は……言っちゃ悪いけどあんま変わらん。いや訂正。あいつが作ったんだから遠慮なく言っていいんだ

服はほとんど変わらないけど、腕輪や頭装備が追加された紫色の模様が入った、薄い黒の腕輪。小さな黒い宝石の耳飾り

「靈介く……の装備は、闇属性にかなりの耐性がある。その他、光属性以外にも少しの耐性がある。光属性は弱点だ。他にもあるが、まあ言わなくてもいいだろ」

え、なんだって？ 無視してたから聞いてなかったよ
武器の方も見ると、なぜか二刀の小刀とメモがある

「その小刀は、黒い方が『世断』、白い方が『夢幻』だ。柄を合わせて、繋げることができる。その武器にも特殊効果が秘められてる」

へえそうかい。よかったねー

「そのメモは、蒼都からの戦闘アドバイスだ」

さて、着替えるか

ウィンドウ開いてステータスの装備を……

Side：香川光蛇

靈介が自分の装備を確認し終えた後、俺も机へと近づく

『炎帝の剛服（上）』 ↑ 体装備
『炎帝の腕輪』 ↑ 腕装備
『炎帝の剛服（下）』 ↑ 足装備
『炎帝の爪靴』 ↑ 靴装備
『炎帝の帽子』 ↑ 頭装備

「光蛇くんの装備は、炎属性に大きな耐性がある。その分、水、氷属性に弱い。その装備は状態異状に強く、即死魔法が効かなくなる。それに攻撃力を上げる効果もある。A G Iが鎧と違って下がらない代わり、防御力は鎧に劣る。ま、そこらへんの鎧よりは断然強いけど。まあつまり、君の装備は攻撃特化だ」

次は武器でも見るか

「次に剣だけど、『ドラゴンフレイムα』だ。αの他にΣとかもあるけど、今回はαにした。αは中距離攻撃にも向いている。M Pを消費して剣に大きな炎のオーラを纏わせることができるし、そんなことしなくても炎属性の力もある」

防具の見た目は、赤い服だ。いわゆる魔法剣士が着るようなものだが剣は少し長く、よく見ると刀身に薄く赤い竜の模様が入っていた

） Side out ）

装備を変えて、慣れるために体を動かしたり短剣を振るったりしてたら、なんか誰かが来て、連絡してきた

『校長室に集まれ』って

V S 《死神》

） Side：《死を誘う者》インヴァイテッド デス）

「許してくれ……許してくれ……許してくれ……」

ガルバが倒れ伏し、泣きながらそんなことを言っている
体中に、ナイフを刺してやった

刺して刺して刺して、回復して刺して……それを繰り返したら、こ
んなになっちゃった

「意外と脆かったなあ」

さて、これで城の守りは一部薄くなったし、ノアちゃんの手助け
もできた

「最後の大事なかな」

この地に封印されている魔神を、解放しないと

） Side：《死^{ヘル}神》）

「……指名、手配？」

壁に雑に貼られていた紙を見て、呟く

「……リノ？　少し、余計」
でも、いい

やることは変わらないから

「ここらに、いるはず」

南西地区に、いる。間違いなく

） Side out ）

二本の小刀は、まとめて右側のベルトに提げた

DEも、もう隠すのめんどいから左側にホルスター作ってもらって、装着した

防具もしつくりきて、結構よかったな

光蛇も装備を赤い服に変えて、ちょい尖ってる帽子も付けてフィ
ンキがちよつと変わった

剣も気に入ってたみたいだった

「来たぞー」

そう言いながら、俺は校長室の扉を開けた

師匠からいろんなことを聞いた

このエノリークにいる出来損ないの魔王のこととかそいつが指名手配にされたとか、第一なんとかのレイボルが動いたとか

一言で表そうか

よくわからん

ってゆーか完全無視モード発動してました。ほとんど内容とかうる覚えです、すんません

っと、まあなに言いたいのかはわかった

「つまりまとめると、そいつ守れと」

「あ……ああ、ぶっちゃけるとそうだな。リビングデッドのやろうとすることは、たとえば意味不明なことでも阻止しないといけないしな」

「おにいちゃんー、今回は、私もしゅつけきしていい？」

「ってことは、俺は留守番か？」

「いや、違う」

レートが遮った

「なにか案があるのか」

「今回動いてるのは、軍とレイボル、そして《死神^{ヘル}》とリノだ。この程度の相手なら、むしろアオトはここにいなきゃ困る。とは言ってもそれは留守番ではなく、不足の事態が起きたときのための保険だ。たとえば、第二防衛兵器解放とかな」

「わかった」

「アオイは今回、データスキルは使用禁止だ。街じゃお前のは危険すぎる。アオイは対魔法使いに向いてるから、軍の魔法使いで構成された部隊を積極的に叩いてくれ」

「うん」

「ユウキは留守番な。アルケミストに戦闘は向いてない」

「……あい」

「已依は、直接参加しなくていい。呼べる中で一番強力なモンスターを最大数呼んで、それを軍の部隊に当ててくれ」

「ああ」

「で、俺は……リノの搜索、そして王の命令の解除を行う。リノの居場所なら、勘で大体わかる」

すこっ

「で、今回はコウタくんたちにも手伝ってほしいんだが……」
「わかった」

はい即答キタ

「今回、クウちゃんとルーちゃんは出なくていい。クウちゃんは実力不足。それに今回は必要最低限の人数で動く必要がある。リノたちにこちらの動きがなるべくバレないように……だからルーちゃんも出なくていい」

「わかりました……」「わかった」

「コウタくんにはレイボル討伐を頼みたい。あいつくらいなら、その装備があれば倒せるはずだ」

「わかった」

「そして最後にリョウスケだが……レミリナ・アヴァンストリーム^{ヘル}の保護、そしてできれば《死神^{ヘル}》の討伐も頼みたい。《死神^{ヘル}》の闇魔法に耐性のあるその装備なら、比較的簡単に倒せるはずだ」

「はいよ」

「相変わらず、焦らず考えるな、お前は」

「ついにリノに手が届きそうなんだ。だからこそ冷静にならなくちゃいけないんだ」

「……はは。じゃ、その作戦でいこうか」

またかよ！

「よっと」

だけど慣れというものは恐ろしいもので……

俺は後ろにバックステップしながらDEをホルスターから抜き取り、特大の闇の球を打ち抜く

そしてお約束の爆発が起こるが、バックしてた俺には届かない

「えーっと……生きてる？」

とりあえず、煙で隠れてて見えないけど、自滅したと思われる白衣少女に呼びかける

「あたり、まえ……でしょ」

自滅でボロボロ……

「見つけた」

と、聞いたこともない綺麗な声が後ろから聞こえた

「ん」

振り返るが、誰もいない

「こつち」

また後ろか

もう一度前に向き直ると……

「っ！ おい」

えっと……名前は……

「レミリナ……？ を離せ」

「……疑問系？」

急に現れたその綺麗な声の少女は、レミリナの頭を掴み、持っていた大鎌を首にかけていた
綺麗な白銀の長髪を持ち、耳みたいに髪を二つ結びにしていた。
瞳は青く済んでいて、服装は赤いローブ。背は低い。手には大きな死神の鎌

「……《死神^{ヘル}》、かな」

名前は、ノア

「……大当たり」

こいつが……俺の倒すべき敵？

なんか……悪意とかあんまり感じないんだが

「魔王、貰ってく」

「って、それはだめだ」

さて、新スキルその1を試すときが来たようだ

「タイムロック」『認証しました。スキルを発動します』

時間が、止まる

世界全ての時間が止まる中で、俺だけが動ける

俺は即座にレミリナの元へ走りより、ノアちゃんの手を払……
おうとしたところで時間が元に戻り、体に疲労が襲ってくる

「っ!？」

ノアちゃんは驚き、跳びすさった

疲労は、まずまずか

ずっと無表情だったから、こーゆー顔は新鮮だ

レミリナが解放され、再び地面に倒れた。意識はもうないみたいだ

「……いま……なにを、したの」

「んまあ親切に説明してやると、時間を1秒止めた」

「時間……?」

「そそ」

「……ありえない」

1秒って結構長いんだよね

「……これが、リノの、言ってたこと?」

「とりあえず、俺は逃げますわ」

「させない」

そうノアちゃんが言うと同時に、俺の体が黒い炎に包まれた

「ん? 暑いな」

黒炎に包まれているというのに、俺の感想はその程度だ

なるほど、あの中二病が自慢するだけはある

「そんな……！」

どうやら通じなくて驚いてるようだ

「あー、まあ、一昔前ならやられてただらうけど今は、無駄だ

待っていると、黒炎は勝手に消えた

「……バースヴィズナ」

ん、この魔法人気だなあ

とりあえず撃たずに、当たってみる

ドガウアアアアアアン！！

……痛い。普通に暑くて痛い

でも、それだけだ

「どうして……高位の闇魔法なのに」

「とりあえず、指令通り倒しとくか……」

なんかいけそうだし

「っ……ダークモンスターLv3」

突如、ノアちゃんの前に大きな黒い塊が現れた
そいつの目とおぼしきものが、俺を捉える

「殺して」

そしてそいつが、雄叫びをあげた

試しにヘッドショットしてみたが、通じなかった。即死耐性があるみたいだ

だから今回、新武器を試そうか

とりあえず右手に黒刀『世断』左手に白刀『夢幻』を構えた

「いくぞ」

と思っただけど相手から攻撃してきた
無数の闇の球を、放ってきた

「ドラゴ。ボールの気弾パクってるだろこれ」

と、俺はメモに書いてあったアドバイスを思い出す

『お前は攻撃を受け止めたりすることに、まったく向いてない。
お前が向いてるのは、完全で完璧な柔の動きだ』

「ふむ」

つまり、こうか

俺はあちこちに飛ぶ無数の球を見分け、小刀を構える手に力を込めた

球は、できるだけ全てかわす

かわしきれないものは、斬るか逸らす

言うのは簡単だけど、これやるの難しいぞ

「とは言ってもかわし続けてちゃだめだな」

タイムロックつと

『認証しました。スキルを発動します』

時間が、止まる

世界全ての動きが止まり、俺だけが動ける

俺は『闇の化身』↑そーゆーモンスター名だった に向かって走り抜ける

止まってる魔法なんて、かわすのは簡単と、化身の目の前で時間が元に戻る

「十分だ」

レベルオプション、Lv50、STR特化、制限時間3秒

『認証しました。スキルを発動します』

「うああああおおお！！ っと」

三秒の間、俺は両手の二刀を全力で振り続けた結果、まあまあ疲れが来て、相手モンスター撃破

「っ……」

「さて、次はどうするの」

「……ダークモンスターLv4」

と、次は闇の怪鳥を呼び出してきた

「よっと」

登場シーン中にさつさと終わらせよう

俺は怪鳥に飛び乗り、言う

「レベルオプシオン、Lv100、STR特化、制限時間0・5秒」
『認証しました。スキルを発動します』

そして俺は即座に両手の二刀を怪鳥の首筋に突き刺す
ゲージが0になった
結果、けっこうな疲労が襲ってきて、相手撃破

「っ……一撃……!？」

ノアちゃんが、一歩後ずさる

「Lv40以上の、戦士。そのくらい、怪鳥、強いはずなのに」

すまんが、こっちはLv100の超戦士だったんだ

「俺の、勝ちだ」

「っ……!」

その後もいくつかの魔法を受けたりしたけど、普通に捕獲した
つか、ノアちゃんはほぼ闇魔法しか覚えていなかった。つまり、
俺とは相性が最悪すぎたってわけだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3237x/>

Accesses アクセス

2011年11月11日17時29分発行